





米國

汝安諾  
塞兒敦

兩氏原著

大日本高水怡莊先生譯輯

# 明治十九年改正教授術

第一卷 定價四拾錢  
第二卷  
第三卷



此書ハ小學校ニ於テ各學科ヲ教授スルノ主義ト法術トヲ詳記シタル  
モノナリ其主義タルヤ專ラ舊來ノ教授法ヲ改良シ心意開發的ノ教授  
法ヲ記スルモノナリ其法術ハ歐米ニ於テ現ニ實行シ其成績ノ著名ナ  
ルモノナリ今般ノ教則改正ニ際シ此主義ト法術トヲ以テ我邦小學ノ  
教授法ヲ改良シ心意開發的ニ向ハシメントス而シテ教育ト實業トヲ  
近接シ實業ハ教育ニ依ラザレバ起ラズ教育ハ實業ヲ目的トスルノ新  
主義ヲ全國ニ施行セシメントスルニアルナリ教育家諸君ハ勿論子弟  
教育ノ任ヲ有スルモノハ必ズ携帶スベキ良書ナリ

東京日本橋區吳服町六番地

奎文堂



東京日本書局編輯 全書 全 文章

格書ハ其ノ旨ヲ示シテハ必ズ製書スルニテ其書ナリ

主善ハ全圖ニ載リテシメテハニマシテ格書ニテ其旨ヲ示シテ其書ナリ  
 並ニ其實業ハ格書ニテ示シテ其旨ヲ示シテ其書ナリ  
 格書ニテ其旨ヲ示シテ其書ナリ  
 小字ハ其旨ヲ示シテ其書ナリ  
 格書ニテ其旨ヲ示シテ其書ナリ  
 小字ハ其旨ヲ示シテ其書ナリ  
 格書ニテ其旨ヲ示シテ其書ナリ  
 小字ハ其旨ヲ示シテ其書ナリ

一 部 大 正 初 年 刊 行 書 目

第一卷 字彙 四 冊  
 第二卷 字彙 四 冊  
 第三卷 字彙 四 冊

米園 漢 書 兩 方 氣 卷 大 日 本 高 木 計 蘇 夫 主 監 譯

和文讀本緒言

上古ハハ、イ、エ、ウ、ヨ、ヲ、ナ、ニ、ノ、ハ、フ、ク、ケ、コ、ノ、有、ハ、  
 等、平假字、イ、ロ、ハ、片假字、ハ、イ、ロ、ナ、ド、イ、フ、物、ト、  
 等、ナ、リ、リ、ケ、レ、バ、殊、ホ、意、シ、テ、其、ノ、詞、を、誤、ラ、セ、  
 ト、ト、此、ノ、歌、ホ、ど、む、か、り、コ、ト、萬、葉、假、字、ホ、テ、  
 書、キ、フ、也、大、方、ノ、文、詞、を、バ、萬、葉、假、字、シ、テ、書、リ、  
 ん、ハ、徒、ニ、字、面、比、長、ク、あ、る、ガ、リ、ヘ、ニ、字、畫、さ、へ、  
 多、ク、テ、煩、シ、ク、也、バ、為、ん、方、を、く、テ、不、便、を、お、ら、  
 小、漢、文、を、の、ミ、用、め、テ、全、ク、假、字、シ、テ、書、ク、事、ト、  
 中、古、平、假、字、片、假、字、と、い、ふ、



最便よきをの出來てより後ハ彼の不便ある漢字漢文をバ用おどして事足るべきを。あふ世の人さきゞより讀み習ひ書き來らる癖うせどして。字とくいへむ漢字。文とくいへむ漢文。あて。他ハ字と文もなきやうに思ひて。實事實學よつきうの利害をむよくも考へだた。漢字かき散し。漢文讀まの。しるを。たけく才ある様も思ひとりて。吾も人を。其の方此學。あのと心をいせて。先漢字つあひあらひ。漢文よそ習ふやどよ。許多の年月を過して。や筆

とるをありかむせバ。ちや齡たけ氣衰へて。あゞし。物物の用もたゞ。かく志つ。若き壯の程をバ徒も過し。老て後ハ。世間一般ハ不通此漢文を。あき。人ハ煩多き漢字を教ふる事。あのと力を費して。世の爲國此爲ハ。させる益をも得せど。あふら生涯を盡さハ。あべての學者此弊めて。いとむ。口惜し。物事の限あり。あし。縦い。あむかり漢字をバよく識り。漢文をバ巧ハあくと。も。世ハ之を讀む人解る人少く。バ。何も。あハ。あん。よし。よむ人解る人多



くとも御國の人悉く唐土人あらねばな布常  
み口もハ御國ぶ星此語を使ひ御國ぬりの音  
を出さざれば得有るべからざをく口もハ御國  
の語音採用あて文もハ唐土此文を書りざて  
ハ得あらざとならば彼の楚人して齊語を  
へさするよりも拙き事ありてあつて唐土人  
もも笑をせぬざきハいふも更めていつも文  
と語とを似えつゝぬものもありてたゞ便あ  
しきのみならざ物學北方の甚ざき害もまを  
りてすべし御國人の物學此をめぐしゝらざ

はと星のたしぐしちハ多くハこせよよる事  
あり心ある者ハ深く慨ふべき事あるまな布  
ありま心づく學者ありしを此の二百年を  
あり以來歌文の學漸く開けてよ星漢字漢文  
の不便ある事をさとりて私の著述もハ假字  
文をのこ用ふる人も多く出來小けれどな布  
公さまの文書もハ假字をバ用ゐさせ給えざ  
り々せバ心もハあらざ思ひあがらせん方か  
くて時としてハ漢めきたる文をまかしてを  
得あらざりしを今の大御代とありてより上



をかきこきや

天皇が詔旨の御書も、假字を交へさせ給ひ、  
下ハ天ごうる鄙の蝦夷の賤の子をまでも、ま  
づいろも五十音假字單語、あといふものより教  
へ導りせ給ひて、專御國語御國文を用ゐさせ  
給ふ事とありふさるハ、いともく尊く忝き大  
御惠ひて、御代の名おあふ明お治る時、生を  
あひたも人民此上なき幸ひて、今よまして後  
ハ、えうなき字學の煩もあく、語と文とハ似て  
もつぬやうある違もなく、吾もさとりよく

人も教へよくなりて、容易く實學實驗をも  
なく得つぬべき世の爲人の爲も甚く、て  
おのづから大御國の御光も添ふとぞおれバ、  
心ある學者の千歳の憾も、全く此の大御代お  
どおくなるべき、但かくありとて、今俄漢字  
をを用ゐる、漢文をを讀むとといふ、ハあらぬ、  
其の心して、徒小年月を過して、實事實學をた  
ふ妨ぐる事あくバ、心のまゝ、漢文をも誦し  
ぬ、漢詩をも歌ひねとぞよ、

○真字してかける和文あり、祝詞宣命假字して



あける漢文あり。二十一代集の序等然る小世の學者等。其體を分別せしむることを知らざして。平假字をるをし見まば。即和文ぞと心得て。近世の儒者等のかけるをさへも。誰ぞしらの文。くれがし。和文をどいひて。不めの、しる者の多き。いとく傍いさ。事ふて。詮ぜる。和文をば。あつて知らぬあり。近世御國學の博士と世小ゆるさき。さるき。その書るだも。あや漢文の癖の清く。はりたるを。いとく稀めて。僅ふ一人二人あるを。明暮漢字漢籍をの。とさだくあへる人等。

の。いりてり。うよくハ書得べき。さき。さき。此の書。今の世の極めて初學の誦讀。此爲ふとて物し。さる。あつて。よめ。さく。りる。と。雅文ハ。容易く。さと。難き。方も。あま。或ハ軍記。或ハ俗物語。を。より。さへ。と。多き。中。ハ。御國文の體。を。ら。ぬ。も。又詞の。あ。や。く。さ。と。び。た。る。も。あ。ま。む。げ。後世。此。なら。ぬ。バ。さ。ま。ご。よ。か。の。づ。か。ら。雅。び。た。る。處。あり。て。其。の。方。ハ。罪。ゆ。る。さ。る。、。ち。せ。ら。る。、。なり。あ。ほ。文。體。の。論。を。た。文。の。解。し。や。う。か。ど。此。細。や。り。ある。事。共。を。



本朝文範の總論にいへまば。今を僅に一ニを  
下にいふべし。

○御國の語もハてにをはの係結カリといふものありて。詞をあらべ調ふるあり。今見やをからんためふ。其のかゝり此詞もハ「」をあらくむすびるを「」をつく。

○「」のあらくあらるハ。いとゆる大段落。一を小段落なり。

○凡べて文もハ。意の急ある時ハ。かのづゝら語の省られ約まること常もありて。初學の輩。そ

の省りまゝなる語をあらでハ。詞づゝのひのいゝおどや。かゝぶき思ふこと多く。今かゝる處ハ。悉く傍も片假字して。一と補ひ加へて示せり。さまじく中ハ。古と今と詞のつゝあひさま異りて。今此世の俗語より思へば。ておを足をもして。まづゝなるやうも思はるも。古もハ常もく。あゝゝお雅あることあり。あゝゝ類ハ。今それてまをは。傍も補ひ加へたるもまゝ。あまじく多くハ漏しつ。

○軍記物語等も見えたる消息文ハ。上下を省き



て用ある處の之を出したるが多くて全文ハ  
いとくまきふて。但し東鑑よりとき前後の地  
此詞あくてハ意のさとり難き事多し。が、る  
類ハその地此詞をも少しづゝのせあるして。  
「」の志るし志て別てを。

○軍記類其他原ハ片假字してかけるも今ハ  
皆平假字ふ書きかへり引きたり。さるハ片假  
字ハ何となくこちなくかこくなくを。平假字  
をこよなくあたらうめてなつうしをしまし  
と並バある。又原ハ真字おちみかき形ど。初學

此輩のともをせバよみ誤るべく見ゆる處ハ  
多く假字を書き加へたり。見ん人原書と字様  
此異なるをあいぶのしと。

目錄

卷一

歷代

儀式

軍旅

卷二

地理

動植

言行

才藝

卷三



武勇

遊戯

俳諧

羈旅

離別附

哀傷

卷四

評論附

說解附

教訓 誠附

諫爭

勅書

院宣御請文

將軍家御教書

消息

和文讀本卷一

稻垣千穎 輯



歷代

景行天皇の御世此段

中山忠親公

次のみ<sup>帝</sup>の<sup>六</sup>景行天皇と申し<sup>き</sup>垂仁天皇の第三  
此御子御母日葉酢媛命也垂仁天皇の御世三十  
年正月甲子日東宮ヲ立給ふ<sup>ち</sup>あ<sup>い</sup>み<sup>の</sup>と<sup>ふ</sup>たり  
の御子<sup>み</sup>申<sup>し</sup>給<sup>ふ</sup>ゆ<sup>う</sup>お<sup>の</sup>こ<sup>の</sup>心<sup>は</sup>何<sup>を</sup>り<sup>得</sup>ん



と思ふとのさもふ。兄のみこ。日まハ弓矢なん  
ほしく侍ると申し給ふ。弟のみこ。日れハ皇位を  
あんでんと思ふと申し給ふ。この言は従ひて。こ  
のかみの御子ハ弓矢を奉り。弟の御子をバ東  
宮に立て奉り給へり。なり。辛未のとし。七月十  
一日位おつき給ふ。御年八十四。世をたれち給ふ  
事六十年あり。五十一年と申し。年。内宴行ひ給  
ひ。成務天皇のいまごみこと申し。武内  
こそ。其の座に参り給む。ざり。のむ。みあご尋ね

させ給ひ。お申したまをく。人々のみな御あそ  
びのあひご。心をゆるふ。むきををりなり。其の時も  
一ひまより。ふ心あるを。此も侍らん。と思  
む。門を固めて。侍ると申し給ひ。あむ。みう  
といあく。あびあく。罷ト給ひた。武内ハ。孝元天  
皇のむまごとなり。此の後。代々。此帝の御ら。み  
として。世お久しく。かむ。今ハ。八幡乃御傍に。  
近く。い。む。たもへる。ハ。此の人。お。い。ま。五十八  
年二月。近江の穴穂宮。お。う。つ。り。ま。き。



後三條院天皇の御世此段

神皇正統紀

北畠親房公

第七十一代三十八世後三條院諱ハ尊仁ト申ス後朱雀  
 第二の子御母ハ中宮禎子内親王陽明門院三條  
 院此皇女ナリ朱雀の御素意ホテ太弟ヲ立給ヒ  
 又三條の御末をも受給へり昔もかゝるたぬ  
 侍りき兩流朱雀三條此内外タチ子受給ひて繼體の主とな  
 りタチまタチりタチきタチ戊申のどタチ即位己酉タチ改元タチ此の天  
 皇東宮ホテ久しくおをタチまタチしタチけタチむタチ去タチづタチりタチ

和漢の文顯密のをしへまタチぐタチもタチくタチらタチるタチをタチ去タチらタチるタチ  
 せ給ふ詩歌此御製もあまタチくタチ人乃口タチ侍るめり  
 後冷泉の末コノ天白王ごま世の中阿れて民間此憂あタチるタチき  
 四月より位コノ天白王居給ひしをいまだ秋のをさめ  
 あタチまタチ及タチむタチぬタチみ世の中此タチなるタチりタチよタチけるタチ有徳の君  
 ありタチまタチりタチくタチるタチとタチぞ申傳へ侍る始めて記録所  
 といふ所をおタチりタチて國々の衰へタチるタチをタチを  
 ほタチしタチきタチ延喜天曆村止よりタチこタチなタチるタチあタチまタチとタチあタチか  
 しタチこタチ御事ありけんタチのタチ天下を治め給ふこと以降



四年太子ヲ讓りて尊號あり。後出家せしむ給ふ。此の御時よりぞ。執柄の權あきらへらきて。君此御みづより。政をあたせ給ふ事よかへり侍る。此はもと其の頃まども。讓國の後院中にて政務ありと見え。四十歳あよりまゝき。

高倉院天皇の御世此段 神皇正統記

北畠親房公

第八十代第四十三世高倉院諱ハ憲仁ト申ス後白河第五の御子御母ハ皇后平滋子建春門院と申す贈左大臣

時信の女なり。戊子のう。即位。己丑に改元上皇政をあたせ給ふ事よとの如し。清盛權を專りせし事ハ。あきらま。此の御代の事あり。其は女徳子入内して女御とて。即立后あり。末の方やうやう所々反亂の間あり。清盛一家此日ざ。天意よそあきける。ことを嫡子内大臣重盛ハ。心ざん。さうして。父の悪行あども諫めける。さへ世を早くしぬ。彌あがり。を極め權をわくたま。よ。時。の執柄ふて。菩提院關白基房の大臣あをせし。



中らひ宜しうぬ事ありて。太宰權帥お遷して  
配流せしむ。妙音院師長大臣も。京中を出さる。其  
のちあは罪せらる。人おやうき。從三位源賴  
政といひし者。院の御子以仁王とて。元服ハあり  
し。あど。親王の宣などあかくて。かゝる。ある  
宮よあまをせし<sup>王</sup>をす。め申して。國々あある源氏  
の武士等お相ふせて。平氏を失ちんと謀る。り  
事あはされて。皇子も失をぬ。賴政も亡びぬ。か  
あまをそれより亂をせめ。り。義朝朝臣が子

賴朝。前右兵衛佐從五位下。平治のころ六位の藏  
人たりし。信賴事をおあし。た。時任官長。  
平治の亂。死罪を申宥むる人ありて。伊豆國に  
配流せしめて。多くの年をおくりし。が。以仁王の  
密旨を承る。院よりも忍び。仰遣を道あり。たれ  
バ。東國をた。めて義兵を起し。ぬ。清盛彌惡行を  
のこす。し。た。主上深く歎りせ給ふ。ちる。あ。小  
遜位の事あまし。と。世を厭をせ。あ。ける。ゆ。息。と  
ぞ。天下を治め給ふ。あ。十二年。世の中チの御いの  
り。平家アノケのあ。め申を神なれ。安藝北トテ嚴島



おあん。參らせ給ひける。此のみりど。御心を人も  
めでたく。孝行の御あくるる。ざり深のりき。管絃の  
方も優まぶせと。おちりま。りり。尊號ありて。程ふ  
く世を早く。あさまふ。二十一歳おま。りま。りた。

承久三年の條 増鏡

一條冬良公

承久も三年ふありぬ。四月廿日。みあどありさせ  
給ふ。春宮仲恭四君ふな。りせ給ふ。りゆづり申させ給ふ。  
近頃みあ此の御齡ふく受禪ありり。ま。ば。あ。れ。も。

めぐたき御末あしんの。同廿三日。今ありさせ  
給へる。を新院と聞ゆを。御兄の院を中院と  
申し。父みのとを本院とぞ聞えさせたる。この程  
ハ。家實普賢寺殿おと。關白御子おておちりつを  
ど。御讓位の時。左大臣道家の大臣光明峯寺殿攝政ふ  
あり給ふ。彼頼經東の若君乃御父なり。さそもおほ  
く構ふる事。忍ふとそれとやうく洩聞えと。ひふ  
し。ざ。も。あ。と。其の心づのひを。あ。り。東の代官  
おて伊賀判官光季といふ者あり。う。め。ぐ。か。ま。を。



御ヨリトのよし仰らるれば御方ヨ參るつを兵のども押寄せたる子ののづるあきやうなるく腹兵きうきうまづひとめをたふとぞ院ハおおりりあぐまあいみトうあらく騷ぐ略下

元弘二年隱岐の皇居北條 太平記

北小路玄慧等作

三月廿六日と申ま御船隱岐國ヨ著きおけり。佐々木隱岐判官貞清府島とりふ所ヨ黒木の御所を造りて皇居とは玉宸お咫尺とて召使せけ

る人とてハ六條少將忠顯ト大夫行房ト女房おハ三位御局おのりある昔の玉樓金殿おひきこへてうきあくまげき竹たらた涙隙なら松ののこえを一夜をあづづつる程もたへ忍ぶあき御らちあらうどど鶏人曉を唱へし聲警固ノ武士ト番を催を聲をたのり御枕の上お近らまづバ夜におしふ入らせ給ひても露まぢろおせ給をた萩の戸乃明るを待ち朝政なけをども巫山の雲雨御夢お入る時も誠小曉ごとの御勤北辰北御拜も怠らせ



こころいひなる年あまを。百官罪ありして。愁れ  
涙を配所の月もあたら。一人位をいへ。宸襟を他  
郷の風もなやま。給ふらん。天地開闢よりあの  
うら。かゝるぬきぎをきかず。さきむ天もあはる  
日月も誰が爲ふ。明なることを耻ぢざらん。心  
あき草木も。是を悲しく。花さく事を忘るべし。

建武元年大内裏造營の條 太平記

北小路玄慧等作

翌年正月十二日。諸卿議奏して曰。帝王の業萬機

事あげくして。百司位をまうく。今の鳳闕僅も方  
四町の内あま。分内狭くして。禮儀とくのあま  
所あしとく。四方へ一町づ。廣げらむ。殿をたて  
宮を造らる。是あや古の皇居も及むね。大  
内裏をつくらるべしとく。安藝周防を料國もよ  
せ。日本國の地頭。御家人の。所領の得分も。二  
十分一をかけめ。抑大内裏と申す。秦の始  
皇帝の都。咸陽宮の一殿をうりして。造らむたれ  
む。南北三十六町。東西二十町のあま。龍尾のき。置



石をもちあそぶ。四方より十二の門をたてらる。東  
 ぬハやうぬい。待賢陽明いうをう門。南ハ美福。朱雀  
 くとうかゆん。西ハをだつてん。さうへき。殷富門。  
 北ハ安嘉。あらん。だつちをん。この外上東上西  
 の二門ハいたるまじく。交戟衛伍を守りて。長時ハ  
 非常をいましめ。うり三十六の後宮ハ三千の  
 淑女よをほひをまじる。七十二の前殿ハ文武  
 の百司みことのをまじる。紫宸殿の東西ハ清涼  
 殿温明うんぬいでん。北ハ當りて常寧殿。ちゆうく  
 観

五節の淵酔ハ  
 舊曆十一月新  
 嘗祭の次夜行  
 儀式あり。

ん殿ア貞観でんと申さハ。きさたもあちの北のみく  
 げどの也アトけうしよでんと號せハ。清涼殿の  
 南のゆむどのなり。昭陽舎ハなつづ。あけい志  
 やも桐壺飛ひきやう舎ハ藤つづ。凝花舎ハ梅つづ。  
 襲芳舎と申さハ。かんありのつづ。此事あり。萩の  
 戸陣の座瀧口の戸鳥曹のざうし。ぬひどの。兵衛の  
 陣左ハ宣陽門。右ハ陰明門。日華。月華。北兩門ハ陣  
 北座の左右ハ對へり。大極殿小あどの。蒼龍樓。白  
 虎樓豊樂院ふらくめん。清暑堂五節ごせちのえんをる。ごい  
 淵酔



古今集  
 さ月まつ花橘  
 の香をかげバ  
 昔の人此袖の  
 香どをる  
 業平朝臣の故  
 事ハ八神殿ハ  
 ハあはた太平  
 記誤まり  
 新古今集大江  
 十里てりもせ  
 ぶぐりもて  
 ぬ春のよめか  
 不乃月夜よま  
 ぐとのどあき  
 源氏物語ハ

似る物ぞかた  
 とあり此事花  
 宴巻不見えこ  
 後會云々こま  
 ハ潮海使の  
 へる七送らま  
 ぐる序の句あ  
 り越の国とい  
 へるハたがへ

嘗じやうゆうあハあの所おて行ちる中和院ち中の院  
 内教坊ハ雅樂所ありみし布ハ真言院あんごむ  
 食じたハ神嘉殿も弓らとり登馬をバ武徳殿ある御  
 覽ぜる朝堂院と申はハ八省院の諸寮是あり  
 右近の陣ハ橘え昔を去のぶ香をしらぬみる  
 小しざる竹の臺いくよハ霜をかさぬらん在原  
 中將ハ弓やならぶひ戎身をへくあみありさる  
 ぐよもまごのあむらなる屋ハ居たるハ官の  
 廳のまのしんでん光源氏の大將ハく物もあ

と詠つつ。 朧月夜ハあおびきでん  
 の細ハ江相公のいわへ越の國へ下る  
 旅ハ別を悲しく後會期遙濡纓於鴻臚之曉涙  
 と長篇の序ハかきたりハ羅城をんの南をる  
 鴻臚館ハなごりあり鬼の間ちよくる鈴の繩荒  
 海ハ障子をバ清涼殿もたてるけんとゆうの  
 障子をを紫宸殿もどたてらる東北一の間  
 小ハ馬周房玄齡杜如晦魏徵二の間ハ諸葛亮  
 遽伯玉張子房第五倫三の間ハ管仲鄧禹子産



蕭何。四の間ふを。伊尹。傅説。太公望。仲山甫。西の一  
 北間ふを。李勣。虞世南。杜預。張華。二の間ふハ。羊祜。  
 揚雄。陳寔。班固。三の間ふハ。桓榮。鄭玄。蘇武。倪寛。四  
 のまふハ。董仲舒。文翁。賈誼。叔孫通あり。畫圖ハ金  
 岡ガ筆。贊の詞ハ小野道風ガあむたうりる。とぞ  
 承る鳳のいづのハ天よのけり。虹のうのぼり雲よ  
 そびえさうもいみづく造り雙べらき。大内裏  
 天災を消さる便なく。回祿たひく。よあよびて。今  
 ハ昔の礎のそ残り  
 略下

儀式

朝賀 公事根源  
正月元日

一條兼良公

大極殿ハ八省  
 院の正殿にて  
 重き儀式ハ皆  
 此処で行はる  
 内辨ハ儀式  
 の時門内居  
 て諸事を辨  
 べり人をは  
 門ハ朱雀門  
 大極殿の南  
 門あり  
 鉦をうりて  
 朱雀門の左  
 の陣は鼓吹騎  
 兵等を列し

是を朝拜とも申をあり。辰の時。天皇大極殿  
 行幸なりて。行をせたまふ。羣臣みな禮服を  
 著して。さあが。御即位の儀式おあ。内辨を  
 どもあ。開門などありて。め。のつ。みをう。こ  
 しむれバ。羣臣列し。門ふ入る。天子高御座。つ



近仗ハ近衛の  
 次將をいひ  
 典儀ハ少納言  
 をいひ  
 香ハ淺香・薰陸  
 香・青木香等あり  
 舞踏まゝ拜舞  
 としふ再拜して  
 笏を置き立て  
 袖を左右に纏  
 居てまゝ左  
 右に小舞を  
 取て小舞立  
 て又再拜する  
 あり

檀原宮大和葛  
 上越

のせたまへを兵庫寮鉦をうり執翳出で帳を  
 八字をかぐ近仗けいひつをまようし圖書主  
 殿香をく典儀再拜をとまふ羣臣の時再  
 いた奏賀奏瑞とく二人のを北庭やすく祝  
 ひまうまことなりしをハ去年北めをた事ど  
 をのあるを國々よを申せばそれを記して今日  
 小を奏するあり此時羣臣再拜をつぎ舞  
 踏をれを武官萬歳の旗をふるありいとめぐた  
 き儀式ともあり神武天皇元年正月一日檀原の

天瑞ハ七トドめ  
 饒速日命の天  
 より將ち降り  
 其子宇麻志麻  
 治命の神武天  
 皇を奉らむ  
 十種の神宝を  
 いふ  
 小朝拜ハ朝拜  
 多き年開白大  
 臣以下殿上の  
 人清涼殿にて  
 天子を拜し奉  
 る儀を百官  
 悉くハ拜せむ  
 朝拜を略する  
 故に小朝拜と  
 いふ

宮をたむと位につのせとまひくる時宇  
 麻志麻治命天瑞を奉らるる日本紀に見え  
 たりこをなるとや始と申さべき又孝徳天皇  
 の御宇大化二年正月一日御かとをのこの  
 ちべるよしかなど書子のせたりあせごよこと  
 此朝拜とハ申をそのむあるハ六十六代一  
 條院正暦より後ハあをともうけたまはるま  
 記録も所見なきやいふへハ大極殿も  
 ありこのをあり今ハ小朝拜をりぞある



春日社ハ大和國添上郡春日山ノ祖神天兒氏ノ祖神天兒屋命建雷命經津主命比賣神ノ四神と祭る

府の官人として近衛府の將監將曹府生おあり無名門ハ清涼殿の南におありうちさハ衣の事あり大うちさ小うらさ等あり

内侍ハ内侍の女官あり瀧口ハ能と所の名にて清涼殿の北におあり武人の布衣をきて且暮此処お候とるといふ

御殿ハ清涼殿あり御帳のかさびらハ夏ハ胡粉

ける

春日祭 建武年中行事 二月の條

後醍醐天皇御製 北畠親房公修撰

上のひつと此日春日祭の使たつ近衛の中少將  
こせをつとむ昔ハ賀茂の祭此おと一今ハ近衛  
比隨身おどむの里ぞ見ゆめる府の官人たりを  
うまき舞人をつとむ賀茂のおつり此おと一  
使無名門のまへよまありて事乃よしを奏を舞

人々のめあつたに藏人いづく祿のうちさひと  
くだりたすふ申の日曉内侍むのうふ藏人出車を  
奉る瀧口とよさぶらふ公卿弁もけふぞむら  
ふめ

更衣 建武年中行事

後醍醐天皇御製 北畠親房公修撰

四月ついでち御更衣たむをばととらぐ御装束あ  
らむむ御殿御帳のかさびらととらむあもてととらむ  
表ととらむ



かて華鳥かご  
をうくやう  
女房ハ女官を  
女官ハ四月中  
ハあもせき山  
ふて、單ハ更衣  
のひとへとて  
精好のきし  
まていづれも  
重ぬるあり

ふんあき繪をかき、壁代のべしる皆徹き、夜のかしこ  
も同ト、燈籠の綱、同ト物なれども、新しき毛をうく。  
ちみ、同ト、志毛ねかき、御毛ふくハ、御毛たふく、  
御毛ぞ毛の綾毛此御毛ふくへ、御毛ちりば毛のま、内藏  
寮毛より是を奉る。女房の毛ぬあ毛せのたぬとも。  
衣毛ぐ毛これ毛ひ毛く毛う毛ら毛きぬ毛す毛く毛も、常の如し」  
撰虫公事根源  
九月の條

一條兼良公

是をあちち式ある事ハ、あちち殿上の逍遙

として、殿上人ども遊び、嵯峨などへむあひて、虫  
を籠みえくび入せ奉る。是コトナリハ堀河院の御とき  
よりちどまる。あちちよそ松あり、鈴あり、あどち、誰  
人も内裏小奉る。又賀茂社の社司など小仰らむも、  
もめさむくるとあんツタハレ

軍旅

源頼信、平忠恒をせむること  
宇治拾遺物語

源隆國卿



昔河内守頼信。上野守めてありし時。坂東は平忠  
恒とりふつものありき。朝廷ヨリ仰せらるるありき。ア  
がごとくおきる。討うたんとく多くの軍あらしめて。茂  
彼がすまかの方へ行向ふ。入海北遙にあり入  
りたるむのひみ。家を作りて居る。お北海をま  
もるものあり。七八日おめぐる。おめぐりて。さぐり渡  
らむ。その日北中お攻めつ。おめぐる。忠恒渡の舟  
どもを皆取隠してけり。されば渡るべきやうも  
あり。濱をたより立ち立ちと。おの濱北まゝおめぐ

るべき。おころをおきと。兵ども思ひたる。上野守  
のりあやう。この海北まゝお廻りてよせ。日頃  
へあん。其の間おや。おまゝ寄せ。おぬりまへ  
もせ。おあん。けあの中よよせ。攻めん。お  
のやつを存外。今日よしておまゝおんずれ。然る  
お舟ども皆取隠したる。いづれもすべき。と軍ど  
をよとをまゝ。軍さう。お渡り給ふ。おやう  
なり。廻りて。およよせ。給ふべく候。おめと  
申し。おれ。おの軍どもの中よ。おの道



ありたる者ハあるも頼信ハ坂東をこの度  
を始め見えされども我が家のつづ人あく聞  
置きたる事あり。此北海の中ハ堤のやうな  
廣一丈をのりして直まじりたる道あり  
深ハ馬のふとむらりたるとき。此の程ハ  
そぎの道を當りたるらめさうりとも此多くの  
軍どもの中ハあるもあるも先ハ  
うちて渡せ。頼信つぎまじりたる馬をりき  
まやめてよせむを。知りたる者ハやありん

四五騎をのり馬を海に打あらしむたが  
み渡りければ。そぎのつぎ。五六百騎はりの  
軍ども渡りたり。おとこ馬の大腹はたちを渡  
る。多くの兵どもの中。三人をのり。この  
道ハあり。残ハ露もあつたり。聞く  
事だおもなりけり。然るも此かろの。あ乃  
國をむ。こぎあを始め。あをす。我ハ  
此重代の者共ありあるも。だおもむ。あ  
ぬ。あく。給へるハ。げ。人ハ勝。つを



の道ありあどさくやきあぢく渡り給ふ程忠  
恒ハ海を廻りてぞよせ給はんぞん舟ハ取隠  
しられバ淺道をバ只我をのりこそ知る直  
おハ得渡り給ふ濱を廻り給はんあひづあ  
とくもく逃もしてんさうあくを得攻め給ハ  
トと思ひて心静よ軍揃へて居たるお家のめぐ  
りある郎等あはく走り來て云く上野殿ハこの  
海の中よ淺き道の候ひるより多くの軍を引  
具して已おあへ來給ひぬいあせきを給え

んとあき聲よありていひけむバ忠恒ク  
ねくの仕度小違ひて我をで攻らせあんだか  
やうに仕立奉らんと云ひく忽よみやうぶを書  
きふをみお扱てさう上げて小舟郎  
等一人のせて持せく迎へて參らせたりけむを  
守殿見て彼此名簿を受取らせく云くかやうに  
名簿よあふりぶを添へて出たせでよきと  
とありされバあぢくお攻むべきお非どと  
てあの文を取きて馬を引返しけむバ軍ども皆



歸りけり。其の後よりいとも守殿をバ。殊小勝せ  
ていみじた人におちりまはといよくいよき給  
ひたり」

陸奥國十二年の合戦の時義家貞任此

連歌 古今著聞集

橘 成 季

伊豫守源頼義朝臣貞任宗任等をせむるあひご  
みちのく小十二年北春秋をおろりたる鎮守府  
をたもて秋田の城おろりたる雪ふりて軍

のをのこども兵のよろひ皆あつたへみありまけ  
る衣河の館岸高く川ありテ楯をいたさき  
てかぶと船おかさぬいご後をくみくせめ戦ふ  
貞任船らたへどしそつひみ城のう後ろよりのが  
せあちたる一男八幡太郎義家衣河におひさく  
せえふきくきたあくもう後ろを見まをのり  
おちり引うへせ物いもんといをせたりとれ  
バ貞任見かへりたさるるみ  
衣楯比たてをほろろびみけり



とけへまけり。貞任くつむを中す。人あころ  
をありむけく。樂 休 鍛

年をへし。糸のみぶき此。くるしきや。

とつけたり。その時義家苦をげたる矢をさし  
もぐしを暇りありけり。さむあり此戦の中番小やさ  
しありたる事かき』

小松内大臣殿兵を召せよと

源平盛衰記

作者不知或云  
葉室時長卿作

内大臣ハ。入道あむも腹あし人あまバ。院參の

事もやあしんぞうん。と思しゆしけきバ。其の  
悪行を塞がんがためとあむしゆく。主馬判官  
盛國を使ゆく。重盛あそ別し。天下の大事を  
聞出し。我を我と思はん者どもハ。急ぎ參せ  
とをよむさきたり。あれをうけたまはるるめ  
いむ。おほるげめくを騒ぎ給をぬ人のかくる  
仰の下るを。まふし。小別の子細コトあるコトを  
とく。難波、二郎經遠、妹尾、太郎兼康、筑後守家貞、肥  
後守貞能らを始とし。如法夜中の事あるをど



も我先子マサシとぞ馳チせ参りける。かゝりマサシなむ老いたるも若きも六条止る者ハあし。小松殿へマサシとてあをて参りり。入道ハ何事ぞ世間のを此さあがり。たハあをマサシ候へやく。とのさまひらむと。そら聞らむ。そをせいでけむ。西ハ條ハ青女房。老尼をハふでとりむ。をぞ残りマサシ。少しも弓馬マサシたづさる程の者ハ一人もなありけり。  
略下

治承四年五月平等院の戦。足利忠綱

宇治川先陣のこと 源平盛衰記

不知作者或云  
葉室時長卿作

此の河ハ浪早しといへども底深う。岩高しといへども渡瀬多し。河を渡して岸をおとす事ハ。燈トナリ此をゆく。手網トのあやつり下あや馬の足をうぞへく浪間を分けよ者ども。とて進トナリむ。然るべきトナリとて伴ふ者ども。略中 三百餘騎を伴ひける。足利又太郎真先かけく下知あがり。此の河を流あくくして底深し。大事の河ぞあやまむ。



み肩を並べく手を取組こ。さ下づらん者をバ弓筈  
み取つのせよ。強き馬をバ上手へ立てよ。弱き馬  
をバ下手み並べよ。馬の足はとづのん程ハ手綱  
をはくりて歩おせよ。馬は足をづまバ手綱をく  
ておよぐせよ。前輪ハ多くかくを水越さバ  
馬のさうづみ乗りのを水ハ多くカを入れ  
よ。馬ハ輕く身をうくべし。手綱ハ實をあくせ  
よ。さうをと引ひくみ。敵ハ目をあけよ。餘ハ  
仰のき内のぶと射さをな餘みうのぶさくてへ

ん射さを鎧の袖をまめのうみあくよ。水の  
上みて身づくろひすを我が馬弱しとて人ハ  
馬ハかりく二人ハあつと押流さるを我等渡  
すと見るなもとむ。敵ハ矢をまつくりて射ん  
どん敵を射るともおのくあへし矢射んと  
て。河の中ハて弓引て推流さを笑むるを。弓  
の本筈わらをすづりみうちあけよ。あまさが  
心をつまなし。えいおも出して渡を断り。かね  
は渡してあやまあはる。水ハ從ひくをあらわす也



たりよ渡さべしとて橋より上へ三段をのり  
うちあげて三百餘騎さとうち入をえいくと  
をえきさけびて渡したり。橋のえとへ一段さ  
がらど三百餘騎一騎も流さば皆ぐして。おの  
ひの岸へさとおのる。こまを見て千騎二千騎  
打入あく渡したり。二萬餘騎馬と人とは防を  
て漏るゝ水おを見えざり。みづのうら前後  
北勢おつぐあずして。十騎二十騎渡しける者  
と一人もたまらば押流さる。大勢河を渡しけ

まバ宮の兵ども志むし平等院お引退く。足利  
又太郎ハ西北岸おうちあがりて。鎧踏むり弓杖  
つき物の具乃水走らり。鎧づきす。鎧ハ緋をど  
しお金物うちいまさ未の時とぞ見え。白星の  
かぶと居頸お著あり。大中黒の二十四さうとる  
矢頭高お負ひ。重藤の弓北真中取り。紅のほろり  
けく。連錢葦毛の馬北太くたくす。お金覆輪  
の鞍置きてぞ乗つり。平等院の總門北前  
打寄て。皆紅の扇おときつ。鎧踏むり弓杖の



きて申しけるハ只今宇治川の先陣渡せるハ昔朱  
雀院の御宇承平ハ將門をうちけん<sup>テ</sup>しやう預り<sup>勸賞</sup>  
し下野國の住人俵藤太秀郷ハ五代の苗裔足利  
太郎俊綱ハ子ハ又太郎忠綱<sup>ナリ</sup>生年十七歳童名王  
法師<sup>トモキ</sup>小事ハ知らぬ大事の軍を三箇度いもご不  
覺<sup>ラ</sup>仕<sup>ラ</sup>らぬ<sup>略下</sup>

粟津原の戦源義仲最後北條

源平盛衰記

不知作者或云  
葉室時長卿作

去年六月ハ水曾北陸道を上り<sup>リ</sup>ハ五萬餘

騎と聞えしハ今四宮河原を落ちけるハた  
ごハ騎ハをまぎざり<sup>リ</sup>粟津のををりよを  
心ハ猛く思へども運の極の悲しさハ主從二  
騎ハなりよけり<sup>リ</sup>まして中有北旅の空<sup>ニテ</sup>獨ゆく  
ある道<sup>ヲ</sup>をま<sup>バ</sup>思<sup>ヤ</sup>る<sup>ハ</sup>哀<sup>モ</sup>を<sup>あ</sup>れ<sup>ル</sup>木曾殿<sup>ニ</sup>燈  
踏<sup>ミ</sup>り<sup>テ</sup>弓<sup>ヲ</sup>杖<sup>ヲ</sup>突<sup>テ</sup>今井<sup>ノ</sup>の<sup>ま</sup>ひ<sup>け</sup>る<sup>ハ</sup>日<sup>ゴ</sup>  
ろハ何<sup>ト</sup>思<sup>ヒ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>薄<sup>シ</sup>金<sup>ガ</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>重<sup>ク</sup>覺<sup>ゆ</sup></sup>  
る也<sup>ト</sup>の<sup>た</sup>ま<sup>へ</sup>む<sup>ハ</sup>兼<sup>平</sup>あ<sup>ん</sup>で<sup>ふ</sup>さ<sup>る</sup>事<sup>侍</sup>る  
べき<sup>日</sup>來<sup>ハ</sup>金<sup>も</sup>増<sup>ら</sup>ぬ<sup>別</sup>ハ<sup>重</sup>き<sup>物</sup>を<sup>も</sup>つ<sup>け</sup>



ぞ御年三十七<sup>三テ</sup>御身盛あり御方小勢ありを  
臆し給ふ<sup>川</sup>兼平一人を<sup>候</sup>餘の者千騎萬騎と  
もあがりぬ候ふべしつひに死ぬべき物故  
よある<sup>性</sup>むを見え給ふあのおのむ<sup>彼</sup>あひの岡小見  
ゆる一むらの松北下小立寄り給ひて心志づ  
あふ念佛申して御自害候へ其の程ハ防矢仕  
りてやがて御供申さべしあのお松北下へハ廻  
らむ三町直<sup>即</sup>小ハ一町小ハよもすぎ侍らト急  
ぎ給へとあくるく涙を押へくときらむ<sup>テ</sup>木曾ハ

なごり<sup>テ</sup>を惜みつ都あきいあみもある<sup>テ</sup>あり  
つむどもあまぎ落來つるを汝と一所<sup>テ</sup>死  
あんと<sup>テ</sup>なりいびく迄も同ト枕小討死せんと思  
ふありとのまへを今井いあか<sup>テ</sup>ハのこま  
ふぞ君自害し給を<sup>テ</sup>兼平則討死<sup>侍ル</sup>あり是を<sup>テ</sup>あそ  
一所<sup>テ</sup>死ぬるとは申せ兵の剛あると申さハ  
最後の死<sup>イセキ</sup>を申さありさすが大將軍の宣旨を蒙  
る程北人の雜人北中お打伏せしめて首をとると  
せん事心うのるべしとく<sup>テ</sup>落給ひと御自害あ



るべしとさくめりさバ木曾誠サレトふと思ひテむらひ  
の岡北松をさしと馳行きけり。今井ハ木曾を先  
だも引返しく命も惜まらず戦ひらる。木曾ハ今  
井を振捨て、暇に任せて歩ませゆく。比を元暦  
元年正月廿日の事をさす。峯の白雪深くして、谷  
北氷もとけざり。向の岡へさぢあひカみと志  
しつら水結べる田を横みうらわど。深田は馬  
を馳入さる。うてどもゆのさきけり。馬も弱り。  
主も疲れうり。さきをとかくさきどもかひぞあ

き木曾ハ今井やつとくと思ひゆ。うらへ見  
返りたるを下相摸國の住人石田小太郎爲久  
ガ能引て放つ矢ハ内壘を射させ。真額を馬の  
頭ハあて。うつぶしハゆみり。爲久ハ郎等  
二人馬より飛でかり。深田ハ入ら。木曾を引落  
し。や即ぐ首級を取てける。今井是をみて。今即最  
後の命ある。急ぎ御供ハ參らん。進出で。申  
し。る。日下来を音ふ。き。けん。今ハ目もみ  
よ。信濃國の住人中三權守兼速ミガ四男朝日將軍



の御めのとご乳母子今井四郎兼平あり。鎌倉殿まども。  
あろしりたる兼平ぞ。首とりて見參ふいさよ  
やとて。數百騎の中ぬけ入て。さんぐと戰ひけ  
まども。大力此剛の者ありれば。寄て組む者ハ  
あし。たゞ開きて。遠矢水のみに射り。さきども  
よろひとけを裏の缺ず。あきまを射ねバ手も  
かまじ。兼平ハ。筋小残るハ。さおの矢も。ハ騎射場  
かしくたる。太刀ガを抜て申しけるハ。日本一の剛  
此者の。主人此御供小自害さる。見ヲなるとへや。東ハ

箇國の殿むらとて。太刀の鋒口みくらとて。馬よるま  
さのはまふあち貫きとて。死ヲしける。兼平自害  
の後ハ。粟津此軍もあつり。り

壽永三年二月。生田森の戦ふ。梶原二度

此かけの事 源平盛衰記

不知作者或云 葉室時長卿作

梶原ハ。今を軍ばたひらなり。寄せよ者共とて。子  
息の源太相具場平して。五百餘騎をぬいて中へど入  
る。此の手ハ。新中納言父子。本三位中將。大



將として御座しけるが敵内に入りと見給ひて  
二千餘騎を差向けて梶原が五百餘騎を中取  
おめて餘す漏るると一時をりぞ戦ひける  
いづれも互ひひりぎりけるがはるる無勢なれ  
バ梶原下手に廻り廻と引てぞ出たりける源太  
をいふと問へむ御方を離れて敵中取お  
められ給ひぬといふおな心うやさくハ討をぬ  
るあや景時生きて何うせん景季が敵に組で死  
あんとて二百餘騎を相具して平家の大勢うけ

散りて内に入り聲をあけて相摸國に住人鎌倉  
権五郎平景政が末葉梶原平三景時ぞ彼の景政  
と八幡殿の一太郎等奥州合戦の時右に目射ら  
せながら其の矢を抜きぬと當に矢射返し  
て敵を討ち名を後代に留め末葉をまば一人  
當千のつをそのぞ子息景季がゆくへおぶつ  
なきて返り入るり我と思はん大將も侍も組め  
やくと名のりあけり響城比べり責入るるを  
名おやまことお恐むけん左右へさとぞ引退く



源太尋ねよとて責入り見まは。景季いまど討ま  
ど。ちどめハ菊池の者どもと射合ひけるが。後ハ  
ハ太刀を抜合せと名のりける。わづらと誰ぞ。菊  
池三郎高望ど。とぎみハ誰ぞ。梶原源太景季と。名  
對面して切合ひたり。源太ハかぶとをうち落さ  
せ。おわわらとめく。三十餘騎ハ取籠めらきて。切  
合ひけるが。菊池三郎ハ押並べて。引組て馬の際  
ハ落重りく。菊池ガ頸をとり。太刀の切鋒ハさ  
貫きく。馬ハ乗出でけるが。父の梶原ハ行合ひた

平三景時源太をうらめなして。矢あててハ  
進ま禦戦ひし。其の間ハ源太ハ鎧させ。志げ  
やまめく。寄せの返しの戦ひける。城戸口ハ真鍋  
四郎五郎と名乗て出合ひるが。四郎ハ梶原ハ  
うらめぬ。五郎ハ手負ひて引退く。平家の兵ども  
入替く戦ひける。景時ハ源太ガ死あぬ嬉し  
さハ猛く勇ましく。豎さま横はら戦ひり。志むし  
息をよつぎらむ。父子相具して。引て城戸へぞ  
いづりたる。さやこそ梶原ガ生田森の二度ハか



敷島大和といふ詞の枕詞  
 みて敷島の大和といふ  
 詞を略して敷島道のひ  
 て歌歌のこゝとをあり  
 古今集の序に難波津渡香山のうたを歌の父母のやうかりといへるよりこゝもすこ難波津といひて歌の事あり

けしとたいをむけれ詩歌管絃ハ公家仙洞の翫  
 其の東夷いこのぐり敷島難波津のことむを存  
 ぶべきあむども梶原を心北剛も人亦勝也す  
 きたる道も優ありり王咲きみごせたる梅が  
 枝をやあぐひよ添へとどさうりりかくせ  
 花ハちりけむどもあひえ袖もぞ残りけ  
 延元元年正月官軍都攻の條 太平記  
 北小路玄慧等作

楠判官山門へ歸りて翌日の朝律僧を二三十人作  
 るとて京へ下しあつこ此戰場ありて尸  
 骸をぞ求めさせり京勢怪と事のとを問  
 ひけむバ此の僧ども悲歎の涙をおさると昨日  
 の合戦も新田左兵衛督殿北畠源中納言楠判官  
 以下宗徒此印とて七人もて討せさせ給ひ候ふ  
 るどお供養の爲お其の死骸を求め候ふありと  
 ぞ答へける將軍を始め奉り高上杉の人々是を  
 さうとあふとぎやむねとの敵どもが皆一度



お討せたりけるトヨハ勝軍をバ志なぐら官軍  
京をを引たりけるトヨいづくも其の首どものある  
らん取て獄門大おほぢを渡せとて敵御方  
此尸骸どもの中を求めさせられども是トヨこそと  
おぼしむ首もたうりける餘有おほまほしきお  
爰は面影の似たりける首二獄門の木おかけと  
新田左兵衛督義貞楠河内判官正成と書附をせ  
らまトヨりるをいふあるおくさう此者トヨり為た  
るらん其の札新田此側似お是ハ正お首あり成ま正け

おも書るをトヨとてと秀句をトヨとぞ書副へ  
て見せたりける又同日の夜半をトヨりお楠判官  
下部どもは松明を二三千燃しつせさせし小原  
鞍馬の方へぞ下りける京中の勢ども是を見て  
すいや山門の敵どもおそ大將を討きて今夜方  
々へ落ち行きお候へと申しりしお將軍もげ  
おもとや思ひ給ひけんトヨさトヨバおとさぬ様お方  
々へ勢をさしむけよトヨとて鞍馬路へも三千餘騎  
小原口へ五千餘騎勢多へ一萬餘騎宇治へ三千



餘騎。嵯峨仁和寺の方より。洩さぬ様は固めよとて。千騎二千騎差分けて。勢を置きざる方もあり。聖りり。さそふ。京中の大勢。大半減づく。残る兵も徒に用心するはなうり。ゆれ。はる。布どる。官軍宵より西坂をあり下て。八瀬。藪里。鷺森。下松。陣城と。諸大將ハ。皆一手にあり。二十九日卯刻。二條河原へ押寄せて。在々處々。火をあり。三所。小関をぞあげたりける。京中の勢ハ。大勢なり。一時。だふ。あを。引。軍あり。ま。て。勢をバ。

大畧方々へ分遣をさせぬ。敵寄をあり。と。夢も知らぬ事ある。俄にあわてふ。免きて。或ハ丹波路をさして。むく。あり。或ハ山崎を志して。逃ぐる。あり。心。發らぬ出家して。禪律の僧もある。あり。官軍ハ。さまで遠く。追。り。る。を。跡。引く御方を。追懸くる敵。と心得て。久我。暇。挂。川邊。ハ。自害を。したる者も。數を。あ。げ。ど。あり。ける。況んや馬物の具を棄て。る。ま。と。ハ。足の踏所も。な。うり。る。皇。將軍ハ。其の日丹波。北篠村を通。



り曾地の内藤三郎左衛門入道道勝が館お著給へバ四國西國の勢ハ山崎を過ぎて芥川おどつきより親子兄弟骨肉主従互お行方をしとど落ち行たりまバ討れうる者をも生きてどあるらんと憑えいきたる者をも討きてど死しつらんと悲む下略

延元元年五月湊川合戦乃條 大平記

北小路玄慧等作

楠既お討まふけまバ將軍と左馬頭と一處お合尊氏直義

ひと新田左中將お打ち懸り給ふ義貞こそを  
見て西宮よりあぐる敵ハ旗の紋を見るよ末々  
此朝敵どもなり湊川より懸る勢ハ尊氏直義と  
覺る是こそ願ふ所の敵あるとて西宮より取て  
返し生田森を後お當て四萬餘騎と三手お分け  
て敵を三方お受られけるはるほどお兩陣互  
お勢を振ひて鬨を作り聲を合ますぐ一番お大  
館左馬助氏明江田兵部大輔行義三千餘騎おて  
仁木細川が六萬よきお懸合て火を散して相戦



ふ其の勢互に討まじ。兩方へ颯と引きのけバ。二番。中院。中將定平。大江田。里見。鳥山。五千よきよて高上杉。八萬騎。懸合て。半時をうり。黒烟を立て。揉合ひたり。其の勢共。戦疲きて。兩方へ颯と引きのけバ。三番。脇屋。右衛門。佐。宇都。宮。治部。太輔。菊池。次郎。河野。土居。得能。一萬騎。て。左馬頭。吉良。石堂。が。十萬よき。懸合せ。天を響。地を動して。攻戦ふ。或ハ引組て。落重りて。首をとる。あり。ど。ど。を。あ。或を打違へ。同。く。馬よ

り。落る。もあり。兩虎。二龍の闘。何も討ま。者多の。け。を。兩方。東西へ引の。人馬の息を。休めける。新田。左中將。是を見給ひて。新手の兵。既。つきて。戦い。ま。決せ。お。義貞。り。自當る。べき。處。を。二萬三千よき。残。左右。た。將軍。北。三十萬騎。懸合せ。兵刃を交へて。命を。鴻毛。より。も。軽く。せり。官軍の。總大將。と。武家の。上將軍。と。み。の。戦ふ。軍。を。射。落。さ。る。矢。を。ぬ。く。隙。あ。く。組。で。下。よ。あ。れ。ど。も。落。合。て。助。く。る。



者あり。只子ハ親をきく。切合ハ郎等ハ主ハ離  
きて戦へバ。馬ハ馳違ふ聲。太刀の鐔音。いゝなる  
修羅のとうどゆうも。是ハハすぎと。影オモカシ先子  
と軍して引きあさる。たる兩方の勢ども。今ハ  
いひとの期を。あさむ。四隊ハ陣一處ハ舉り  
て。敵と敵と相交る。中黒の旗と。二引兩と。巴ハ旗  
と。輪違と。東へ靡き西へ靡き。磯山嵐ハ翩翩して。  
入違ひたるむらりみく。いづもを御方の勢とを  
見え。この新田足利ハ國の争。今を限とぞみえ

たり。る。官軍ハ。元來小勢をきバ。命を軽くしとく  
戦ふと。雖。遂ハ大敵ハ懸負て。残る勢僅五千餘  
騎。生田森の東より。丹波路をさしと。落行きけ  
る。數萬の敵勝ものり。是を追ふ事甚急あり。さ  
きどもいひとのなむ。ひるまむ。義貞朝臣。御方ハ  
軍勢を落ち延びさせん爲。後陣ハ引きささぐり  
て。かへしあひく。戦をさる。ほども。義貞の乗られ  
たるける馬ハ。矢七筋まぐ立ちる。あひと。小膝  
折りて。たふさきたり。義貞求塚の上ハあり。たち



て。乗替の馬をもち給へども。あへて御方是を志  
らざりけるも。や。下りて乗せんとす。人なりり  
り。敵や是を見知りたり。ん。をち取籠め  
て。是を討たんとしける。其の勢。辟易して。近  
く。ハ。みよら。さ。も。も。十方より遠矢よ  
射ける矢。雨。や。霞のふるよりも。猶繁し。義貞ハ。薄  
金といふ鎧。鬼切。鬼丸と。多田。満仲より傳り  
たる。源氏重代の太刀を。二振を。う。れ。たり。ける。哉。  
左右此手。小拔き。持ちて。さ。づ。る。矢と。バ。飛。越。え。上

る矢を。を。さ。う。の。ふ。た。真中を。さ。う。射る矢を  
を。二振の太刀を。相交へて。十六ま。を。切。て。落。さ  
す。中。略。小山田太郎高家。遙の山。此。う。へ。より。是  
哉。見て。諸。鎧。を。合。せて。馳。參。り。己。う。馬。小。義。貞。を。の  
せ。奉。り。て。我。が。身。ハ。徒。立。み。な。り。追。懸。く。る。敵。を  
禦。ぎ。け。る。が。敵。あ。や。う。小。取。籠。め。と。す。遂。小。討。せ  
み。り。を。その。あ。ひ。だ。り。義。貞。朝。臣。御。方。の。勢。此。中。へ  
馳。入。り。て。虎。口。小。害。を。遁。れ。た。す。』

和文讀本卷一終



明治十五年十一月十三日板權免許  
同 年十二月 出版 [定價貳拾錢]  
同 十八年八月十八日再版御届

埼玉縣士族

編輯出版



發兌

稻垣千穎

東京下谷區仲徒町三丁目七番地

普及

同下谷區練堀町十四番地

奎文堂

同日本橋區吳服町六番地

和文讀本卷二

地理

伊勢國

本居宣長

稻垣千穎 輯

伊勢國ハ。かた國のうま<sup>傍</sup>國と古語おもひひこ。  
北のちそより。南北はてや<sup>美</sup>で。西の方ハ。山々つら  
なりつ<sup>續</sup>ききこもこ<sup>ウキ</sup>青垣をなせ東の方ハ  
入海もていせの海といふ<sup>ウキ</sup>こをあり<sup>ウキ</sup>うくていづ  
こも山と海との間廣く平原ふして北ハ桑名

○和文讀本卷二





より南ハ山田まで廿里あまりがほゞ山といふ  
物<sup>テ</sup>も越ゆることあくひさつ<sup>連</sup>ぎのく<sup>國</sup>  
をらあまそ此間小廣き里々多りる中小山田安  
濃津松坂桑名あど殊小賑もくく大ある里あ  
り大のこ京より江戸まで<sup>七</sup>國や國を經てぬ  
く間小<sup>如此</sup>あをかりの大里ハ近江の大津と駿河の  
府とを<sup>ホカニ</sup>あきく<sup>除</sup>有ることなす<sup>サキ</sup>ああの國々も  
思ひゆるるなる<sup>サキ</sup>件の里々よつぎて四日市白子  
などよき邑ありかくく此の國海の物山野此物

すべてともか<sup>ハ</sup>暑寒も他の國<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>ぶる  
よきも甚し<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>た<sup>ハ</sup>さむさを北の方へ  
よるや<sup>ハ</sup>次第小寒<sup>ハ</sup>風ハよく吹く國あり國  
此賑をく<sup>ハ</sup>たことハ大御神の宮小詣<sup>ハ</sup>づる旅人  
たゆることあく殊<sup>ハ</sup>春秋のほゞハいとくよぎ  
はくした事大<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>天の下<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>び<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>土肥え  
て稻いとよ<sup>ハ</sup>た<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>の物も<sup>ハ</sup>た<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>物も大<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>皆  
よ<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>松坂ハ殊<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>き里<sup>ハ</sup>小<sup>ハ</sup>里の廣き事  
ハ山田<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>ぎ<sup>ハ</sup>た<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>ど富<sup>ハ</sup>る家<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>江戸<sup>ハ</sup>よ店と



いふ物をうまへおきく。手代といふものを多く  
あはせく。あきなひせきをあるどハ國子のそ  
居て遊びをり。うをべハきもあしきうあくハ  
いたく豊におおひりく渡るすべく此の里町を  
ゆびきく正しういふ。家なまわろく。一ツごとみ一  
尺二尺づゝ出入りて。ひとくあしきいもく志  
けあし。家居ハけくもいこの名し加しき。されど内  
々のすまひをいよす。水ハよた所とまろき所  
とあまき。むくくうらば。川水をくあく。潮もさく

ぬバ。船通をび山へを一里あまり。海へハ半里あ  
まり。諸國のたよりよ。ことま京江戸大坂ハた  
よりよ。諸國の人北入り来る國あまバ。い何こ  
へも。便よし。人の心ハよくもあしき。おごりて  
まよと少し。人北かたち。男も女も。おあうびこ  
るあしき。さくみなくよろ。女ハ。里の豊賑をく  
し。あま。姿よそひよ。まべきをさく。京まか  
とま。事あし。人北物いひハ。尾張國より東北國  
々ハ。たのり多きを。伊勢ハ。おあま。こあま。りな。



ちをど山城大和ありとてハ何となく聲いやく詞  
もいやく事多しをゆる呉服物小間物のた  
ぐひハよき品を用ゐて山田津かどくハこゝを  
く代物よき品を商人の京より志いりも松  
坂をこゝとみ物よく上々の品あり京のあき人常  
よ來通ふあり時々のちやま物もをり過ぎば諸  
藝ハ所がらみあをどくハよきあともあはれを  
ろくの細工いと上手あり神社佛閣をべくもた  
はくしをどく此の國ハ他國比人あはく入りよ

む國ある故よよろぬ物もおろく盗など多  
し松坂ハ魚類野菜などすべくゆさうありされ  
ど魚もハ鯉鮒少く野菜もハくわゐる蓮根もど少  
し松坂のあぬあともハ町筋の正しからばとど  
けあきと船此通をぬとあり  
紀の國比名所ども

本居宣長

待乳山ハ大和國の堺ゆと紀の國比伊都郡なり  
角田川ハまづち川比あともあるべし此の川みあ

此文をべて紀  
記万葉等の古  
書に見えらる  
名を本わして  
あはれとさむ  
其心してみむ  
バ文意のさし  
りあき所も  
あり



紀とハ葛城山のうちよりいで。北隅田莊を流  
きて。きの川もおつるあり。紀の關ハ和泉國より。  
紀國北名草郡小こゆる雄山ミチノありて。南の麓を  
る山口村小近し。袖中抄ホを山の關守とあり。白  
鳥關トといへるも。この關の事あるべし。名草山  
ハ。紀三井寺の山なり。あくら北濱ハ海士郡賀田  
浦の南北方小。田倉崎飽等といふ所ある是あり。と里  
人此言傳へたるチリとぞ。吹上濱ハ若山の西南にて。  
若の浦北北あり。雄のこなとハ。今若山のうちよ

五瀬命ハ神武  
天皇の御兄ミ  
也

湊といふ所小。小野町といふありて。蛭子社ガある。  
そこよをのしむといふあり。五瀬命のかんあお  
ま雄之芝まし。跡ありといへり。小野町といふも。と  
雄の町なりといへり。おの蛭子社コ。吹上社とい  
ふ社ともあらべ祭れり。或説小。吹上社ハ關戸村の  
矢の宮をミといへり。雜賀浦ハ海士郡にて。雜  
賀莊ミとく。廣き所あるその中。あな北浦の西北  
方小。雜賀崎といふところあり。おのミ邊。雜賀  
浦あるべし。浦のち初島しまハ。同郡濱中莊椒をトく



み村の八町をとり海中に地北島といふあり東  
西四町あまり南北八町をわきの島あり其の島  
北三町あり西に島ありて沖島といふ東  
西五町は南北六町をわきありこれ二の島と浦  
のはつしまといふをすて北山八在田郡山田莊  
よかしく村といふ<sup>小</sup>手<sup>ラ</sup>ありてその村を伊都郡  
北堺とく山のおくあり白崎八日高郡衣奈莊衣  
奈浦の東南の方を衣奈八幡といふ<sup>ヤ</sup>あり其の社  
北縁起ふ白崎といふことみえたり三穂の岩屋

ハ同郡三尾村の二十五町をとりひびきみあま  
の海べよあり岩屋北中石の観音の像あり熊  
野道のうち日高川鹽屋のあつりより西の海べ  
よ長き松原ありと和田北松原といふこの岩屋  
ハ其の西のきをある野島阿古根浦ハ同郡志不  
屋浦の南に野島里ありその海べをおこね北浦  
といひと貝の多くよりと集る所ありきり<sup>切</sup>山  
ハ同郡熊野道北りみべふて切目坂切目浦切目  
村あり<sup>下</sup>山ハ村より一里をとり東北あり村の北

あこね貝ハ古  
くより書み見  
えりるひを  
り



ふ切目王子社もあり。以<sup>岩代</sup>とくろハ同郡あり。切目  
をたぎく。次子岩代あり。西岩代東岩代とて。村あ  
ある。岩代王子社海べあり。千里濱ハ岩代の南  
の邊より。み<sup>南部</sup>あべままでの間一里半むありの所を  
いふ。昔元弘元年七月三日。大地震ゆて。紀の國千  
里濱二十よ町ぐやど。忽陸とあむよう。太平記  
あむせり。三名部ハ岩代の南あり。三名部村。み  
なべ浦あり。其の十町むあり海中ハ島あり。こを  
鹿島あり。さく三名部の南ハ堺浦といふありて。

郡の堺あり。そこまどハ日高郡。そをよりあまこ  
ハ牟婁郡あり。磯間浦ハ。たあべの王宿村の南神  
子濱つゞきよあり。神島ハ。その一里むあり海中  
まあり。まるといへり。あらの濱ハ湯崎<sup>白良</sup>  
釜山と瀬戸との間あり。里人ハ白濱といへ  
る。此の濱北真砂。遠く見むハ雪のごと。神藏山  
ハ。新宮より二町むあり東南あり。社の説ハ。天  
照大神と高倉下と。二神を祭るといへり。石のは<sup>階</sup>  
を六間むありのりて。上ハ堂あり。地藏の像



高倉下命の御  
霊の神劍を奉  
て神武天皇に  
奉らせしこと  
史よとえり

をおけりといへり。そまを神倉權現といひく。其  
の外に社ハあり。彼の高倉下命の神劍を得たり  
しところハ、あくなりとぞ。イナナル熊野村ハ、新宮ヨ、上熊  
野、中熊野、下熊野とぞ。三村あり。三輪ヶ崎ハ、新宮  
より那智へゆく道の海べあり。新宮よ一里半  
むよりありて、けしきよた所あり。佐野ハ、佐野村  
といふありて、みまが崎のつゞきなり。佐野、岡を  
村より七八町北ヨあり。玉浦ハ、那智山の下ある  
粉白浦といふ所よ。十町ばかりあり。みまそよ

何り。ちあまこころまといへるハ、玉の浦の南北海  
中ハ、ちりぐ離お岩あまバ。それをいへるなるべし。  
其の外ハ、島をあり。熊野御崎ハ、那智山北下濱  
宮よりゆく海べの道を、大邊地といふ。その間ヨ  
上野村といふあり。カラ海中へ長くつぎいでたる崎  
おて、志布の御崎とも。鹽崎浦ともいへり。ソコニみまき  
の神社あり。少彦名命を祭る。此の所の海ハ、のり  
り志ほくぐら潮とて、年を重ねて、片潮ヨ流れて。  
志布の満干ハ、拘らば、いと早く流るまバ。海を渡



る船人のいたく怖るゝ所あり。有馬村ハ新宮より北の方へ伊勢甚の方へ五里むろりゆきて森本といふ所の二十町むろり南ハあり。そこハ産田神社よこ花の窟あり。里人よこなまりて大般若窟といふ。此の窟の山高サ二十四五間北めぐり三町むろりあり。此の窟ハ伊邪那美尊を葬奉周る所といふを。又或説ハいざなとの尊を葬奉れる所ハ産田神社よこ花の窟ハ火神なりといへ。楯ガ崎ハ木本莊二木島といふ所より一里む

ろり海中ハあり。昔ハ此の所伊勢と紀の國下の堺ありナリと。里人いへり。錦の浦ハ長島莊長島村の一里むろりひびしあり。此北地昔ハ志摩國なり。とぞイナ上の件磯間浦よりミナハ皆むろりの郡チヨリ

動植

狗大ある蛇を咋殺今昔物語は話

源隆國卿



今ハ昔陸奥國ニ住ミける賤シ者あり家ニ數  
の犬を飼ひて常ニ具して深山ニ入りて猪鹿を  
とる事ヲ晝夜明暮の業トシ狗も主ガ山へ  
いぢバよろよしびとあといきおちてゆき猪鹿  
を昨殺を役トすかくとる事を世の人狗山と  
いふあるべしかくる時ハ食物をもちて二三  
日も山ニ止ること多し或時此男例の如く犬  
もせ具して山ニ入りて其の夜ハ大なる木のう  
ちニ入りて傍ニ弓をびと太刀をおき前ニ火を

たき狗どもハめぐりみ皆婦たりけり然るも  
夜ふけと狗どもよくねいりたるも年ごろと  
むとかけとる狗ありて俄ニ起來りて主ニ向  
ひておびたぐりてほえをむ主何をおゆるお  
やと異しく思ひて見ゆとてよおゆべき物を  
し狗ハ猶吼えやまばし主ニ向ひてをどりか  
りておきとるおゆ主驚きてほゆるき物もあ  
きよかくあるハ獸ハ主をしくぬをのむバ人  
もなれ山中おと我をくくもんと思ふなとん切



殺してすてむやとて。太刀を抜き威しむるも  
も少しも退りぬ。いやましおほえければ。かくる  
狭き穴にてくちひつゝのまをば。あしうんと思  
ひて。うつぶより外へ躍出でけり。其の時よ。おれ  
狗うつほの上の方み躍りあがり。物もくひつき  
ぬ。主さそへ我をくらちんとくほえたるおハあ  
らけり。らりと見るうち。何と云ふとぞ。おびそ  
し。お物狗と共に落ちつゝ。狗なやも放たせ。くひ  
つき居たり。主見るよ。長二丈餘ある蛇あり。主刀

をぬきて。蛇を切殺して。狗引離しけり。こまハ。  
木の木の上。大蛇のまをけむを。おとぞ。そのう  
つぶよりふし。らむを。蛇の吞まむとてあり。  
我見て。狗ハほえけるなり。狗あくして。木の蛇よ  
まうまをば。たまそのらんや。目ぐ爲。あをあ。びあ  
お忠ある狗ありとく。具して家へ歸りしとあん。  
語り傳へらると也。

猿の鳥を使ふこと 古今著聞集

橘 成 季



文覺上人高雄興隆のころ見まをりける水清瀧  
川の上水大なる猿兩三足ありりるが一の猿岩  
の上水あふのきふしく動りて二足はたちちの死  
て居るをけり<sup>仰</sup>上人あやしく思ひてうくまて見  
けむバ鳥一兩飛び来て水のぬたる猿のかこと  
らよあたりあむづばのりあまそ猿のあをつ  
さけり猿なむをくくこのだ死あつるさまあを  
むバ鳥次第よつつきく上よのがりて眼をくら  
らんとしける時猿鳥の足をとりそあきあがを

ありりその時残の猿二足出来て長きつづらを  
持ちて鳥此足お付てけり鳥とびさうんとをむ  
どもうなまむむさてやぐく川よありそ鳥をバ水  
みなげ入むてうづらのゆきをとりそ一足のあ  
りいま二足を川上より魚をこるまがり人の鶉つ  
のひらるを見て魚をとんとしけるよや<sup>アラシ</sup>  
ぎもぞ思ひよりたりる鳥ハ水あげいむとれと  
むどもその益あくて死あけむを猿どもりかう  
あきて山へ入りより<sup>コバ</sup>ぬぎたより事まの



あつり見たるナリとて、まゝあをち。上人のうらうけ  
る事あり」

鴨の類くさぐ

本居宣長

田中道磨が語りりるハ鴨ハ大ある種四くさあり。  
第一大なるをまづもとひ次種大あるをひと  
りといひ次をあぢといひ。最もちひさきをたの  
べといふ。皆同ト鴨ハ形の大き種小きよよ  
りて。名のかたるあり。あぢ種うらべなど。万葉の歌

およめり又あいさとしふ一くさあり。これを鴨の  
くさひなものと。ひさくあふとあり。万葉七の歌よ。  
あきさとあるハ。此の物ありといへり」

牛馬 犬 徒然草

ト部兼好

人ヲつく牛をむ角をきり。人ヲくふ馬をバ耳をきり  
て。其のあらしとひ。あらしとつけぎして。人をやぶ  
らせぬるをぬカしとのぶあり。人ヲくふ犬をバや  
あふべのしは。是皆科あり。律のいましぬあり」

鹿牧律ハ凡馬  
牛及有觸蹴踢  
咬人而記稀松  
繫不如法者皆  
四十疏ハ畜産  
賦人者裁而角  
踏人者絆足囓  
以者截而耳



無益小生類を殺すまじきこと 徒然草

程 卜部 兼好

雅房大納言ハ、<sup>ガク</sup>ぎやく<sup>ノ</sup>の<sup>コク</sup>こくよき人にて、大將トウシヤも  
もた<sup>ナシ</sup>な<sup>シ</sup>む<sup>エ</sup>やと<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ぶ<sup>レ</sup>ける<sup>ル</sup>ある院ハツの近習キツナヒある人  
た<sup>ハ</sup>づ<sup>イ</sup>いまあ<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>す<sup>マ</sup>し<sup>キ</sup>事を見侍りつと申さ<sup>セ</sup>せ<sup>ケ</sup>  
む<sup>バ</sup>。何事ぞとと<sup>モ</sup>せ給ひ<sup>ル</sup>る小雅房卿鷹トウより  
ち<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>き</sup>たる<sup>ル</sup>犬の足をきり侍りつるを中  
垣の穴より見侍りつと申さ<sup>セ</sup>せ<sup>ケ</sup>る<sup>ル</sup>よう<sup>と</sup>ま<sup>し</sup>  
く<sup>も</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>ハ</sup>ぶ<sup>レ</sup>め<sup>し</sup>て日おろの御氣色もた<sup>グ</sup>

ひ昇進もしたず<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ざ<sup>り</sup>ける<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>む<sup>の</sup>りの人鷹を  
せ<sup>し</sup>む<sup>た</sup>り<sup>り</sup>る<sup>を</sup>思<sup>ひ</sup>む<sup>べ</sup>あ<sup>れ</sup>ど犬の足ハ跡を  
き事あり。虚言を不便あ<sup>ま</sup>どもか<sup>へ</sup>る事をき<sup>の</sup>  
せ<sup>た</sup>ま<sup>ひ</sup>てあ<sup>く</sup>ま<sup>せ</sup>給ひ<sup>ける</sup>君の御心ハいと  
尊<sup>き</sup>ま<sup>し</sup>なり<sup>」</sup>大<sup>う</sup>さ<sup>い</sup>ける物を殺<sup>し</sup>いた<sup>め</sup>る  
う<sup>さ</sup>め<sup>る</sup>遊<sup>び</sup>樂<sup>ま</sup>ん人ハ畜生殘害のた<sup>ぐ</sup>ひ  
あり。萬の鳥獸トリち<sup>ひ</sup>さ<sup>た</sup>虫ま<sup>ぶ</sup>も心をと<sup>え</sup>てあ  
ま<sup>さ</sup>ま<sup>を</sup>見る<sup>小</sup>子を思<sup>ひ</sup>親をな<sup>つ</sup>の<sup>し</sup>く<sup>く</sup>夫  
婦を伴<sup>ひ</sup>ね<sup>く</sup>る<sup>い</sup>のり欲<sup>あ</sup>あ<sup>く</sup>身<sup>を</sup>愛<sup>し</sup>命<sup>を</sup>



をしめること。ひとへは愚痴なる故。人よりも  
やすうて甚しく。世よりよきことをあつて。命を奪  
むんこと。いふので。うらやまし。うらやまし。すべし  
一切の有情を見て。慈悲の心あかさん。人倫の  
あゝ

南殿の櫻此ふと

古今著聞集

橘 成 季

南殿此櫻ハ。村上の御時式部卿重明親王の家此  
櫻他花ニふち異ありと。うらやまし。うらやまし。すべし

南殿ハ紫宸殿  
あり櫻ハ南階  
の左の方にお  
り

その後。たゞの炎上。やけおろせ。又ソレニぬ  
木をぞう。あつて。代々の帝。おの花を賞  
せ。さし給ひ。花の宴を行む。承久。右馬権頭  
頼茂朝臣。うらやまし。時。やけおろせ。やぐ。造  
内裏。あつて。ふね。大監物源光行の家。より  
つう。あつて。よ。聞え。めし。うらやまし。うらやまし  
とぞ。いづ。その時の種。あり。たん。あつて。つ  
あ。その櫻も。いく。やど。あつて。焼けぬ。ま。今ハ  
あ。と。あつて。あ。あ。あ。あ。



御溝ハ禁中の  
流あり呉竹の  
臺ハ仁壽殿の  
西あり

くせ竹 加老竹 徒然草

ト部兼好

呉竹ハ葉ほそく。加老竹ハ葉むろし。御溝ミカ子近き  
淡竹タンハ加老竹。仁壽殿の方苦竹よりて植ゑらるるは。  
くせ竹あり

むろの木

本居宣長

田中道磨ミグいへりしハ。万葉集の歌よみうる  
むろの木といふものハ。今もいづこコも多くあ

る物あり。美濃の不破郡多藝郡おどおて。ひむろ  
とも。ひむろ杉ともいひ。伊勢の員辨郡桑名郡あ  
ごりおそ。たちむろともいひ。尾張の羽栗  
郡おそ。ねむむろともいひ。へほの木ともい  
へり。まべマく山よ多き木あて。地おちふと。高くた  
つと。二種ありく。ちふ方チフおハ大木ハあきを。立て  
るものシあを大あるも多し。柏子ヒヤシといふ木よ似て。  
又杉シを似たり。二種ともいふ。實おちくたるもの  
あり。といへり也。



まろこ菅の歌  
万葉集に見え  
たり

あるすげといふ草 とぬまこの木

本居宣長

世よかやつり草といふ草の小きやうある草の  
田よおひて田夫のい甚といふ草あり美濃國  
みてこまをまるふといふ三河國まをハもるす  
げといふよコありコ管と歌よよめる物よ  
をあハとドりと田中道磨いへり  
とぬりこの木といふ木ハの色いと白く葉ハ榎  
の葉ハ似て大木ハある物あり實ハハハのくの

八重櫻ハ聖武  
の御世ハ奈良  
ふりゑらむと  
よハ物ハ交  
えハり

如き形ハて上の方ハ葉のやうハひらありハと  
んの木美濃國飯木村ハ多くありてハおハとハむハ  
おハなハと同ト人いへり飯木村ハこの人此故  
郷ありトコロハ多藝郡なり

家ハあハまほハき水草 徒然草

ト部兼好

家ハありハまハ木ハ松櫻ハ五葉もよハし花ハハひ  
とへハなるハよハハ重櫻ハ奈良の都ハのハありけ  
るハ此の頃ぞ世ハあハくあり侍るハある吉野の



花左近のさくら。皆むくへみそこそあせ。八重櫻  
 ハ異様の花のあり。いとこちこくぬぢけらう。  
 忍ぶともありあん。遅櫻もさすきやう。虫のつき  
 なるもあづの。梅ハ白きうも紅梅ひとへなる  
 がとく咲きたるも重りうる。紅梅のおほひめで  
 うきも皆をの。可愛。おそき梅ハ櫻もさたあひく。か  
 げえおと里けおさむく。枝もあづもつきたる心  
 うし。むくへあるが。もづさきをちりうるハ心と  
 くもこのして。京極入道中納言ハなるひとく梅  
 敏

楓ヲみへテト  
 三ツハオンドト

をあん。軒ちうくうあるときうりなる。京極の屋此  
 南むきよ。今も二本侍るめり。柳まさをの。卯月  
 むのりの若うんで。楓。むべく萬の花紅葉もまさ  
 る。めでたきりのあり。橘桂いひきも木ハ物ふ  
 り大ある。草ハ山吹藤。のきうむさなで。こ  
 池子は蓮。秋の草を。ぎ。むくもさ。ち。あ。う。は。ぎ。を  
 みあべ。ふちをのま。あ。を。ふ。日。ま。も。あ。う。新。宣。を  
 んだう。菊。黄。菊。も。つ。さ。ら。む。朝。顔。い。づ。ま。も。い。と。高  
 う。む。さ。う。や。あ。ある。垣。も。あ。げ。う。ら。ぬ。よ。この  
 小



有り世もよき事なるもの。うらめきたる名のきく  
 むく。花も見あせぬあどいとなつういかむむ。  
 大か何もめぐるしく何ういたいのいよあ  
 らぬ人比をて興いざるいのいなり。さ申うのいのいあ  
 くてありあん

言行

高倉院、天皇女童子御衣賜をせし御事  
 平家物語

不知作者或云  
 信濃前司行長作

隆陽家の説小  
 天一神のある  
 方をふさがり  
 とひひてりか  
 ゆるんとある  
 方ふさがり  
 地子いでて一  
 夜さけりての  
 ちまゆくを方  
 たがへといへ

安元七年のころ布ひ御方たふへの行幸のあり  
 しいまいさいをいだふ。雞人曉を唱ふる聲明王の眠を  
 驚いを程いもありしいをいのいも御ねざめがあま  
 て。つやく御寝もなまいざりりいを。況んやさゆる霜  
 夜のむげしいきいのい延喜の聖代い國土の民どもが  
 いまも寒りるらんいとい夜のおといぐいあして御衣  
 をぬぐをたまひける事あいまいでもおほいめ  
 いいわが帝徳の至らぬ事をぞ御歎きありけ



女房ハ女官の  
事ハ即ちさき  
の女此童の主  
あり

深更ニ及で程遠く人のさけぶ聲志けり。供奉  
の御とぐハきくもつけとまアルニ主上ハききしめ  
して只今叫ぶハ何者ぞあせ見て参まと仰せけ  
まをう宿直人ぶある殿上人上日の者子仰せて  
尋ぬまバ或つトま女童あやしのめの長持の  
ふさ蓋げたる提があくあくぞありいるいのよと  
問へバ主の女房此院の御所ニ候をせ給ふがこ  
の不ど漸あしてたくまつるきぬを持ちて参る  
わどふたが今男の二三人まあらうできて奪ひこり  
裁  
請  
来

てまうりぬるどや今ハ御装束のあらをこを御  
所ニ候をせ給らめまはあぐしく立宿らせ  
給ふべき親し知御方もましおきずこをを思ひ  
づらるよあくなりとぞいひるさくかの女  
童を具して参りよいのように奏聞したりられバ  
主上きいめしくあるむざん何者の志をさら  
てらあるらんとく龍顔より御涙を流させたま  
ふぞ忝き堯の代此民ハ堯の心乃をあらなすを  
哉をて心とはら故よ皆をあらあり今の代此民



も、朕が心を以て心とするゆゑ、この<sup>奸</sup>さす<sup>ル</sup>きも  
の朝もありと罪を犯<sup>ス</sup>て、こ<sup>チ</sup>をわがちおぼあ<sup>ル</sup>ま  
や、とぞ仰せとせらる<sup>ル</sup>さ<sup>レ</sup>るゆ<sup>ヰ</sup>ても、取ら<sup>ズ</sup>つとん  
衣ハ何色ぞと仰せけむバ、あ<sup>ハ</sup>ぐ<sup>ノ</sup>の色と奏<sup>シ</sup>建  
禮門院其のとた<sup>カ</sup>いまご中宮よて渡らせ<sup>テ</sup>ま  
ふ時あり、其北御方へさやうの色あたる御衣や  
候ふと御たづねありけむを先<sup>ノ</sup>のより<sup>キ</sup>を<sup>ル</sup>る  
ふ色い<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>き<sup>ク</sup>参り<sup>テ</sup>るをく<sup>ハ</sup>ぐ<sup>ノ</sup>のめの  
わ<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>ぞ給<sup>ハ</sup>せ<sup>ル</sup>る<sup>ハ</sup>いまご夜深<sup>ニ</sup>ま<sup>シ</sup>こ<sup>シ</sup>さ<sup>シ</sup>

る目おもぞあふとく、上日の者をあまこつけ  
て、主の女房の局もでおくとせましく<sup>ル</sup>るぞ  
かたどけあきさむバあや<sup>ハ</sup>の男賤の女みい  
ふるま<sup>ハ</sup>ぐ<sup>ハ</sup>た<sup>ハ</sup>ご<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>北君<sup>ノ</sup>千秋萬歳<sup>ハ</sup>北寶算<sup>ハ</sup>とぞい  
の<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>ける

行成卿實方中將お冠おとされ給ひ  
こと 十訓抄

不知作者  
大納言行成卿、いまご殿上人にてあ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>る時



實方中將いゝなる憤うありらん。殿上も参りお  
ひていふ事もなく。行成の冠をうちかきして。小  
庭もなげきしてけり。行成をさしもさじがせし  
て。との<sup>主</sup>をり司をめぐりて。冠とりと参まると。冠  
て。守刀より<sup>筭</sup>あうがいぬきとりと。鬢<sup>搔</sup>いつくろ  
ひと。居直りていゝなる事お候ふやらん。忽ち  
かうほどの亂冠も預るべき事こそ覺え侍らね。  
其の故を承りて。後の事おや侍る筈あらん。とこ  
とうるをいゝをせけり。實方ハ志とけてみげ

歌枕とハ古く  
より歌よと  
あつたる名  
所のことあり

おたり。折しおはどととより。主上御覽して。行成  
はいどき者あり。のく<sup>半</sup>あ<sup>部</sup>た心あんとこそ  
思わざり。とて。そのたび藏人頭あきたりけ  
るゆ。多くの人を越えそなるとおけり。實方<sup>關</sup>をを  
中將をめぐりて。歌枕見て参まると。陸奥國おな  
しつのをさされらる。やがてかこよてうせ<sup>卒</sup>みけ

三條内大臣殿のよこ 十訓抄  
不知作者



三條内大臣殿  
ハ大相國實行  
公の御子公教  
公あり

三條内大臣御をとりまらうとようぞ來たりけ  
る客。隣公重少將の居らむたり詣るが。この殿  
さ侍わくひと物をいひあがりて大つぶさ磔りてう  
ちける傍の格子をいとおびたぐ三くうち九り  
らむバ客人けしきあをえける二人ヨリテをめぐりてた  
がうつぞと問をせ給ひりれば隣の少將の細を  
あき事をとゞめとら候ふと申しらむバうち  
あ三らむ客人中内へ入らせ給へあやまちもど出  
くる一とて我も引入り給ひらむ。又後よりあ二らむ

ければかしこくぞ二と一をのりうちいひき。是ハい  
あ一ととゞめもあ給むバ物語してあをせ上上ヨリテ臆  
ハ一あ二く三こそあるべけむオモレテといみとくあり二が一か  
ま一し人なりと。其の客人のたまひ一らむ二とあり一。今  
の世ハ不覺ふあを二する一とや二そ一り聞え二ま一し  
此の殿ハむげみ道心のおを二らむ一と二あ一や京極  
大納言雅俊卿のいみとく腹あ一く二て一い二つ一と二あ一  
く齒をく二ひつめ一。い二あり一とあ二らむ一と二あ一ハ似  
給む二ぎり一らむ人あり



古今著聞集  
公助父おうらるること

橘成季

武則公助といふ隨身父子ありけり。右近のうま  
をの北<sup>馬</sup>里ゆき。日ろく仕りたると。子公助を  
場<sup>賭</sup>所めくうちるを。おげのく事もあくて  
うたせられバ。みあ人い。このおみげぞ。かくハ  
うごまぞ。といひけむを。い。おみげ候ひあバ。衰老  
の父<sup>倒</sup>追ちんとせん。おどよ。たふせなぞ。侍らバ。  
きこめく不便あまぬ。おむバ。あくののごく心

のゆくをどうとる。と申し。おむバ。世の人  
い<sup>満</sup>みどた孝子ありといひ。く。世のおおえ。これよ  
りぞい<sup>甚</sup>できよらる。

小松内大臣殿賀茂祭見の事 十訓抄

不知作者

小松内府賀茂祭見んと。車四五輛むのり。よて。  
一條の大路ゆいでたまへり。物見車ハ。みあたて  
あてて。ま<sup>公</sup>ま<sup>公</sup>あ<sup>公</sup>な<sup>公</sup>い<sup>公</sup>の<sup>公</sup>ある<sup>公</sup>車<sup>公</sup>の<sup>公</sup>け<sup>公</sup>と<sup>公</sup>せん  
ぞとんと。人々目をま<sup>祭</sup>ま<sup>祭</sup>し<sup>祭</sup>ら<sup>祭</sup>る<sup>祭</sup>所



なる車ども幾引出し々るを見まばみか人もの  
らぬ車どもあり々々。可ぬと見所をとりと人せ  
煩をさ<sup>下</sup>のたれぬ。あか車を五輛たてあのをた  
りけるあり。其の頃の内府北き<sup>空</sup>とみそい。いこの  
る車あるともあそひがうこそ有りけりど  
も。六條の御息所のあるきためしもよくなや  
あぢえとすひけんさやう北心をせ。あさけあ  
し

日野資朝卿のおと 徒然草

為兼卿中納言  
ありし時永仁  
六年隱謀のよ  
し聞えて北條  
家よめしとら  
世に佐渡お流  
き並給ひし事  
あり

ト部兼好

為兼大納言入道めしとととと。武士どもうち圍  
こく。六波羅へあそゆた々世に。資朝卿一條<sup>邊</sup>  
りみてこそ世を見てあちうとやま。世よあらん  
ねをひいごうくあそあまをしとととと。いと  
れらる。あの人東寺の門は雨やととりせとととと  
らる。あか<sup>ヲ</sup>をそのとととと。北集り居たるが手もあ  
しも。あぢ<sup>不具人</sup>ゆののみうちりき。いびくも不具よ  
あぢ<sup>異</sup>ゆうあるを見て。とりぐよたぐひあきとせ



者あり。尤愛する小足まりとあそび多く、おもひりた  
すひらるるちどぬ。やぶと其の興つきく見よとく  
いぶせくおぼえけむ。只すあわおめけけけか  
らぬ<sup>汚</sup>そのおを志のむとあそび多く、歸りてのちこ  
の間裁木を好む異やう小曲折あるを求めて、  
目をよろおをけけつるを、そのかつを愛する  
ありらると興なくおぼえければ、鉢ようあそび  
らるる木ども皆ありすくらむゆらむ。はもありぬ  
ぶきころとあり」

安養尼盜小衣とせし事 古今著聞集

橘 成 季

横川の惠心僧都の妹<sup>正</sup>安養の尼比とよ。強盜入  
りゆらるる物どもをとりていざよらむ。あま  
うへハ紙ぶきまといふ物をうりを引き著て居  
らむたりらるるよ。姪なり尼のをとよ。小尼君とく  
ありけるが。ちりまあまを見けむ。小袖をひ  
とつとりおとしたりらるる。これをおも  
人とりおと侍りらる。奉るとておもあて來たり



けむバ、尼うへのいをもむるコトハたあむもとりての  
 ちハ、あが物とこそ思ひつゝめぬしの心ゆるさ  
 ばとんものむむコトハ盗人ハ、いすごと  
 ちくハよもゆのどとらぐをちてねを行ます  
 ととせたまへとありなむバ、門のあさへちり  
 いぞ、やとよびあへし、これをおとさむめ  
 乃里たしのお奉らんといひけむむぬむびとど  
 も立とまりと志むしあんどたるけしあて悪あ  
 しく参りよけりとととるまたる物どのをもさな

ころ返しねきとかへりあなるとあんカクリタメタル

松下禪尼明障子を繕ふ徒然草

ト部兼好

相摸守時頼の母ハ、松下禪尼とぞ申したる守を  
 いせ申さるゝとありたるアリあむけたるあ明り  
 里障子ゆうどのやぶむむをのりをきりまちし  
 ちとむれバ、せうとの城介義景その日のけい經  
 めいして候ひたるがコトハ給コトハなり男其を  
 らせ候もんコトハやう此事よ心得たる者も候ふと



申され々せむ。そ此男<sup>ハ</sup>尼<sup>ハ</sup>が細工<sup>ハ</sup>よもまきり侍  
らトとく<sup>ナ</sup>なる<sup>ハ</sup>一間<sup>ハ</sup>づゝを<sup>ハ</sup>せむる<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>義景<sup>ハ</sup>皆<sup>ハ</sup>を  
はまの<sup>ハ</sup>候<sup>ハ</sup>もん<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>遥<sup>ハ</sup>み<sup>ハ</sup>た<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>候<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>べ<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>ご  
ら<sup>ハ</sup>候<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>見<sup>ハ</sup>苦<sup>ハ</sup>しく<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>重<sup>ハ</sup>ね<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>申<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>せ<sup>ハ</sup>けれ<sup>ハ</sup>た<sup>ハ</sup>。  
尼<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>後<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>へ<sup>ハ</sup>ん<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>へ<sup>ハ</sup>とも<sup>ハ</sup>け  
ふ<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>。且<sup>ハ</sup>ご<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>處<sup>ハ</sup>あり<sup>ハ</sup>。物<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>や  
ぶ<sup>ハ</sup>せ<sup>ハ</sup>たる<sup>ハ</sup>所<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>修理<sup>ハ</sup>して<sup>ハ</sup>用<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>ぞ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>若  
き<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>見<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>せ<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>心<sup>ハ</sup>づ<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>申<sup>ハ</sup>さ  
せ<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>いと<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>ご<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>かり<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>。世<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>治<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>道<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>。

潔清

儉約を本とし、女性をせむとも、聖人此心をかき入  
り  
略下

### 才藝

堀河院、天皇の神樂を多近方<sup>ハ</sup>傳<sup>ハ</sup>させ

給<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup> 體源抄

### 豊原統秋

多近方<sup>ハ</sup>資忠<sup>ハ</sup>小<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>幼<sup>ハ</sup>くて<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>せ<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>バ<sup>ハ</sup>神樂<sup>ハ</sup>の  
道<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>傳<sup>ハ</sup>へ<sup>ハ</sup>ざ<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>ける<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>堀川院<sup>ハ</sup>資忠<sup>ハ</sup>が<sup>ハ</sup>手<sup>ハ</sup>より<sup>ハ</sup>ゆ<sup>ハ</sup>で



とく傳へしめたりとを。近方を尋召して。召人  
の中よこの道絶なバ口をくわべしとて。近方  
を名しと。近衛の陣子候をせと。萩の戸北邊に近  
くめしと。御自ぞ教へ給ひける。但御口うりし  
物をを仰らむと。師時卿しく傳へ仰らむ  
れば。彼の卿も聲ぞとるかりけむとも。此の道北  
博士もハなりもなり。おのづから師時候ハざり  
ける時ハ。近方かうしひととぎる限ハ。幾びも  
うたひてぞ。きつせねと。まゝなるよくなりぬ

と思召しける時ハ。物をバ仰らむと。御歌を  
とめさせあをし。けり。三年までよるひる  
近く候ひるも。御口うりし物をバ一度も仰  
らむけり。古體あり。や又くひ物あり  
々。おのづから師時卿なんどの。たけな  
飯をいきてたびり。紙をせ。僅はあめづ  
きてぞ。二三日もまゝける。かくし。十六歳  
おありてぞ。始めて内侍所の御神樂は柏子とり  
た。けむ。めづ。みて。始て。ほめさ



せねちしきしけ<sup>レ</sup>神樂の曲ハ<sup>レ</sup>そでみ絶えぬべ  
ありけることを<sup>レ</sup>み<sup>レ</sup>のどの御口より給ひらる<sup>レ</sup>か  
でたの<sup>レ</sup>まける事あり<sup>レ</sup>」

後醍醐天皇の九宮此御歌 太平記

北小路玄慧等作

第九宮ハいまご御幼稚におち<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>せバ<sup>レ</sup>とて中<sup>ウキ奉スレ</sup>  
御門中納言宣明卿に預け<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>都の内<sup>ニ</sup>お<sup>レ</sup>御座  
有りける<sup>レ</sup>此の宮<sup>ニ</sup>こ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ハ八歳おな<sup>レ</sup>せ給ひけ  
る<sup>レ</sup>常の人よりも御心<sup>ニ</sup>ごま<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ぐ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ね<sup>レ</sup>ち<sup>賢</sup>

ま<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>バ常ハ主上既<sup>ニ</sup>も通<sup>レ</sup>をぬ隱岐國と  
やらん<sup>ニ</sup>流<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>給ふ上ハ我<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>り都の内<sup>ニ</sup>お留  
りても何<sup>レ</sup>うせん<sup>レ</sup>哀我をも君の御座あるなる國  
のあ<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>へ流<sup>レ</sup>し遣せ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>責めてをよそ<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>ら  
も御行末をうけたま<sup>レ</sup>をらん<sup>レ</sup>かとかき<sup>レ</sup>くどき<sup>レ</sup>り  
ち<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>く御涙<sup>ニ</sup>さ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ふせ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>び<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>ても君の  
押籠め<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>て御座ある白川を京近き所<sup>ニ</sup>とき  
く<sup>レ</sup>宣明あ<sup>レ</sup>ど我を具足<sup>レ</sup>して御所へハ參らぬ<sup>レ</sup>ど  
と仰あり<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>バ宣明卿涙を押し<sup>レ</sup>皇居程近き



所<sub>レ</sub>おてだ<sub>レ</sub>候<sub>ニ</sub>も<sub>レ</sub>御供仕りて參せん事仔細あ  
 るま<sub>レ</sub>ど<sub>レ</sub>候<sub>ニ</sub>ふ<sub>レ</sub>白川と申<sub>レ</sub>候<sub>ニ</sub>ふ<sub>レ</sub>都<sub>ハ</sub>より數百  
 里をへて下<sub>ル</sub>道<sub>ハ</sub>ふ<sub>レ</sub>候<sub>ニ</sub>ふ<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>因法師<sub>ガ</sub>都  
 を<sub>レ</sub>霞と共<sub>ニ</sub>出<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>ど<sub>レ</sub>秋風<sub>ぞ</sub>ふ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>白川の關と  
 よみて候<sub>ニ</sub>ひ<sub>レ</sub>歌<sub>ハ</sub>て<sub>レ</sub>道の遠<sub>キ</sub>程<sub>ハ</sub>人<sub>ヲ</sub>通<sub>サ</sub>ぬ<sub>レ</sub>關  
 あり<sub>ト</sub>を<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>め<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>給<sub>ヘ</sub>と<sub>レ</sub>申<sub>サ</sub>き<sub>レ</sub>られ  
 ば<sub>レ</sub>宮御涙<sub>ヲ</sub>押<sub>ヘ</sub>させ<sub>レ</sub>給<sub>ヒ</sub>て<sub>レ</sub>暫<sub>ハ</sub>仰<sub>出</sub>さ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>事  
 も<sub>ナ</sub>し<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>有<sub>リ</sub>て<sub>レ</sub>さて<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>宣明<sub>我</sub>を<sub>レ</sub>具<sub>足</sub>し<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>參  
 ら<sub>ト</sub>と思<sub>ヘ</sub>る<sub>レ</sub>故<sub>ニ</sub>か<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>う<sub>レ</sub>申<sub>サ</sub>き<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>あり<sub>白川</sub>

か<sub>レ</sub>り<sub>ハ</sub>四<sub>本</sub>縣<sub>ト</sub>て<sub>レ</sub>鞠<sub>場</sub>の<sub>レ</sub>木<sub>ヲ</sub>栽<sub>ウ</sub>る<sub>レ</sub>事<sub>ハ</sub>あり<sub>裁</sub>る<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>故<sub>實</sub>あり<sub>テ</sub>乾<sub>キ</sub>は<sub>レ</sub>松<sub>坤</sub>は<sub>レ</sub>楓<sub>巽</sub>と<sub>レ</sub>栽<sub>ウ</sub>る<sub>レ</sub>あり

の關とよみ<sub>テ</sub>う<sub>レ</sub>ハ<sub>ト</sub>全く洛陽渭水の白川<sub>ハ</sub>ハ  
 非<sub>ズ</sub>此の關奥州の名所あり近<sub>ニ</sub>び<sub>ル</sub>津守國夏<sub>ガ</sub>  
 是<sub>ヲ</sub>本歌<sub>ハ</sub>み<sub>テ</sub>よ<sub>シ</sub>たり<sub>レ</sub>う<sub>レ</sub>ハ<sub>ト</sub>東路の關<sub>ハ</sub>まで  
 ゆ<sub>レ</sub>ぬ<sub>レ</sub>白川も<sub>レ</sub>日數<sub>ハ</sub>へ<sub>レ</sub>ぬ<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>秋風<sub>ぞ</sub>ふ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>最勝  
 寺<sub>ノ</sub>か<sub>レ</sub>り<sub>ノ</sub>櫻<sub>枯</sub>む<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>栽<sub>ル</sub>替<sub>ル</sub>と<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>藤  
 原雅經朝臣<sub>ハ</sub>あ<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>名<sub>殘</sub>の<sub>レ</sub>春<sub>ぞ</sub>とも<sub>レ</sub>あ  
 白<sub>ク</sub>川<sub>ハ</sub>此<sub>ノ</sub>花<sub>ノ</sub>下<sub>蔭</sub>是<sub>ハ</sub>皆<sub>名</sub>ハ<sub>レ</sub>同<sub>ト</sub>く<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>所<sub>ハ</sub>  
 替<sub>ル</sub>る<sub>レ</sub>證歌<sub>ナ</sub>り<sub>レ</sub>よ<sub>シ</sub>や<sub>レ</sub>今<sub>ハ</sub>心<sub>ハ</sub>み<sub>レ</sub>め<sub>レ</sub>言<sub>出</sub>さ  
 すと<sub>レ</sub>宣明<sub>ヲ</sub>を<sub>レ</sub>恨<sub>仰</sub>ら<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>其<sub>ノ</sub>後<sub>ハ</sub>より<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>か<sub>レ</sub>きた<sub>レ</sub>え<sub>戀</sub>



しとどろふ仰せとせむべよろろ何物うた御氣色もて  
中門ふたせ給へる折ふし遠寺の晚鐘幽は間  
えけむバ。

つくぐと思暮しく入相の鐘をきくも君ぞ

戀した情内は動ききくことを外は顯せ御歌のを

みくしき哀は聞えしうバ其の比京中の僧俗男

女是をたうふと扇はかき附て是こそ八歳の

宮の御歌よと翫むぬ人ハなうをけり

源義家朝臣の江帥小物學びしと古今

著聞集

橘成季

義家朝臣十二年の合戦の後宇治殿へまゐりて  
戦の間此物語しるるを匡房卿よしくきく器  
量をかこち武者あせどもなる軍の道をバ志  
らぬとひとりごとみいをもむるを義家の郎等  
きくてけやけききとをのこすふ人かなとねを  
ひつりたりさるちど江帥出らせりるふやが  
て義家もいづけるみ郎等かゝるごと城こそ

十二年云々  
陸奥の戦あり  
宇治殿ハ関白  
頼通公なり

江帥とい大江  
匡房卿太宰権  
帥はあきし  
故小申を



孫子鳥亂者  
伏也といふこ  
と見えず

たまひつをレとレりレきレむレさレだレめレをレやレうレあら  
んといひき車レのレとレきレける所へレきレみよレまレて  
會釋○せレむレりレやレがレくレ弟子レはありてレをレきレより  
常レはレまレうレでレ學問○せレむレりレその後永保のレり  
せん○のレとレ金澤の城をせめり○はレひレとレつレらレ此  
雁○とレびレりレりレ苅田○此面○ありん○とレ志レるレがレ俄  
は驚○きてレつレらレをレみレづレりレ飛歸○りレけるレをレ將軍  
あや○しレくレつレむレをレねレさレん○先年江帥○のを  
し給へる事あり夫軍野○はレふレ時ハ飛雁○つレら○  
伏

城○やレぬレる○其の野○は必敵○ふレたるレべ○し○つレめレて  
をレまレるレべ○き○よ○下知○せレるレをレば○手○をレ分○ち○て  
三方○をレま○く○時○あ○ん○の○ご○く○三百餘騎○をレり○く○  
あ○た○り○り○々○兩陣○亂合○ひ○て○戰○ふ○こ○と○限○あ○し○さ  
を○ど○も○の○ね○て○さ○り○ぬ○る○あ○と○あ○ま○バ○將軍○の○軍  
か○ち○に○乘○り○て○武衡○等○が○軍○や○ぶ○を○あ○り○江帥○の  
一言○あ○の○と○ま○し○あ○が○あ○ぶ○な○の○と○ま○し○と○ぞ○い○を  
む○ら○る○

經信卿三舟○に○乘○ら○む○こと○ 十訓抄



白川ハ京の西  
ある大井川の  
一名あり

不知作者

白川院西川は行幸の時詩歌管絃の三の舟を浮  
べてそのまじりのひとを分けてのせむせむなる  
ふ。經信卿遅參の間おとの布り舟御けしちあ  
のりりる布どふ。とをそのまじり参りたるけ  
るが。三事兼ねたる人ゆき。とぎをよひさまのき  
て。やゝどの舟はまれよせ候へ。とをををたりけ  
る。時よとをまじりみどりのけを。のくいとん料よ。  
遅參せむせむなるよこそ。管絃の舟よのりる。

詩歌を獻せむせむたるなり。三の舟ぬのるとハ是  
なり

賴政三位の才能比ふと 十訓抄

不知作者

高倉院の御時御殿のうへは鶴のなきけるを。あ  
しきことあると。ゆのまきべと。いふことよ  
て有けるを。ある人賴政よいさせらるべきよ  
申しむせむ。さりあんとき。ゆれそ來りふり。  
此の由を仰せらるるよ。かしゆをきて宣旨をう



けたまをうとく。心中おあをひらる。ハ。ひるだお。あ  
いさ。鳥あをむを得か。さきを。五月の空闊ふ。く。  
両さへふり。いふをのり。我を。で。弓箭の  
冥加。つき。ふり。と。ねを。ひ。八幡大菩薩を。ねん  
と。奉り。を。聲を。尋ね。て。矢を。を。あ。つ。ふ。る。やう  
お。あ。え。け。む。バ。よう。と。見る。お。あ。や。ま。さ。ず。中。り  
も。く。る。天。氣。よ。り。を。ど。め。て。ひ。と。く。感。歎。い。ふ。を。の  
り。な。り。後。徳。大。寺。左。大。臣。の。と。き。中。納。言。ゆ。て。祿  
を。の。け。ら。む。る。よ。か。く。あ。ん。

ほととぎす名をも雲井よあぐるうたよ。

頼政とりあへど。

弓をり月の。射。る。ま。ま。の。と。と。

とつけたりける。い。み。ど。り。り。ま。ま。の。り。出。で。

後よ。

昔養由雲外射雁。今頼政雨中得鷓。

とぞ感ぜらむ。頼政墓。目の外よ。そ。や。を。取。り  
へ。して。持。ち。た。り。る。を。後。よ。人。の。と。ひ。を。む。を。  
一。不。覺。り。さ。た。と。バ。申。し。行。ひ。た。り。人。を。ぞ。射。ん。



がためなり。とぞこころへける

道風朝臣の書比こと 古今著聞集

橘 成 季

延喜の聖主醍醐寺を御建立のとれ道風朝臣は額書きおゑとせよ。仰らせと額二枚を給をせたり。一まいハ南大門一枚ハ西門の料あり。真草兩やうぬりたそ奉るべきよし。勅定ありけむ。仰はたれとひく。兩様おかきておゑとせり。真は書きたるハ南大門のせうあるべ

きを草の字比額ををせし門よりたれたり。道風こそをみと。あをれ賢王やとぞ申し。その故ハ草のづく殊おのきをましておゑけるが。叡慮おかなひく。あく日頃の議あたらまりと。こせらる。まゐらゆの。こき御をのらひなすべし。そをほめ申さるべし。

齊信卿拍子のこと 十訓抄

不知作者

後一條院の御時。清暑堂の御神樂。公任卿拍子



劣ハとりて拍  
子をうつ料か  
り

とるサダむきサダきよくあるるる。期キヲ望ノゾみとく。齊信卿上  
臆オソみて上ノ居ルらむたりけり。小コ管フ絃キ者ノにてあら  
ねバ。定めてよも承伏せどと思ひて。劣セをさしや  
つと。氣色むのりゆづるよしをせとむるる。辭  
せむることとなくく。や即つと拍子をととむる。思  
を下せよ。あへなくねがえ。始終きく。小失コあぐめ  
てつと。事をさす。以レ川ノより。あの事ハ御沙汰候ふ  
ぞ。といもむれバ。公ノ事ノの道めを候へむ。かこ此  
ごとく用意仕まりとぞ答へらむる。いそどあ

りけり

經家馬術の志と 古今著聞集

橘 成 季

武藏國の住人都築平太經家と。高名の馬乗馬飼  
ありけり。平家の郎等ありけむを。鎌倉右大將め  
しどりく。景時小預けとむり。そ此時陸奥よ  
り。大きくしとたけき惡馬を奉りたるけむを。い  
ふあとの者なり。まけり。きよあえある馬乗と  
よ。面々のせとむけれむ。初ハたりもたのり者



なごり々星幕下思ひナシガアタらむをナシさるナシよナシても。  
此の馬よのる者なくしてやまんナシこと。口惜しナシた事  
あり。いナシうナシをナシどナシと景時よいひ合せ給ひナシを  
バ東八ヶ國ナシ今ハ心ナシおナシくナシき者候とナシ但召人經家  
ぞ候ふと申ナシしナシをナシバナシさナシとナシバナシめナシせナシとナシ則召出さ  
せぬ。白き水干ナシ葛の袴ナシをナシどナシ著ナシたりナシける。幕下ナシの  
る惡馬あり。つナシうナシまナシつナシりナシてナシんや。とのナシこナシまナシをナシせ  
けナシをナシ經家ナシのナシあナシりナシてナシ馬ハ必人よのナシとナシるナシべ  
き器ナシめナシ候へナシをナシいナシのナシよナシたナシけナシきナシ人ナシよナシ從ナシをナシぬ事

成ニナル程ウハサ  
通リトシテ

や候ふナシべきと申ナシしナシけナシをナシバ幕下入興ナシせナシをナシけり。  
さナシとナシをナシつナシうナシまナシつナシれナシとナシて。則馬を引出さナシぬ。誠  
よナシ大ナシきナシ小ナシ高ナシくナシしナシとナシあナシちナシりナシをナシ拂ナシひナシとナシをナシねナシまナシをナシり  
けり。經家水干の袖ナシをナシ星ナシとナシ袴ナシのナシをナシ高ナシくナシ狭ナシと  
て烏帽子ナシがナシけナシして庭ナシにナシたナシりナシ立ナシちナシらナシるナシけナシしナシまナシ  
づナシめナシしナシくナシぞ見ナシえナシらナシるナシ。かナシねナシとナシ存ナシ知ナシたりナシなるナシよ  
やナシ響ナシをナシどナシたナシせナシうナシりナシけるナシ。その響ナシをナシをナシげナシとナシしナシ  
繩ナシとナシせナシたりナシけるナシをナシ少ナシしナシも事ナシとナシせナシばナシをナシぬナシを  
しナシりナシらナシるナシをナシさナシしナシ繩ナシよナシきナシがナシりナシてナシたナシづナシりナシよりナシて乗ナシ



りてりまやぶくおつりあがまて出でけるを少  
くはしくせく<sup>即</sup>うちとをえその<sup>徐々</sup>の<sup>本ノマ</sup>とあゆませ  
て幕下の前もむけくたて<sup>サマ</sup>けり見る者めを  
驚さぶといふ事なりよくの<sup>本ノマ</sup>とせ今ハさゆうめ  
てこそあはめとの<sup>ユルヤ</sup>よませける時ありぬ大き  
に感<sup>ユルヤ</sup>たましめて勘當ゆるさせく<sup>サマ</sup>既別當もあさ  
むふり<sup>サマ</sup>」かの<sup>サマ</sup>經家が馬のひけるハ夜中むあり  
に起き<sup>サマ</sup>何<sup>サマ</sup>ふりあるらん白き物を一<sup>サマ</sup>を<sup>サマ</sup>け  
むつり手づあ<sup>サマ</sup>と持來て必<sup>サマ</sup>あひけり<sup>サマ</sup>ま<sup>サマ</sup>べてよる

むのり物をくもせく夜明くむ<sup>散</sup>ば<sup>散</sup>を<sup>散</sup>け髪をぬ  
もせく馬の前もハ草一把もた<sup>散</sup>あ<sup>散</sup>ば<sup>散</sup>さ<sup>散</sup>むくと<sup>散</sup>た<sup>散</sup>  
うせくぞありける幕下富士川あひ<sup>掃</sup>ぎ<sup>掃</sup>もの狩<sup>掃</sup>り  
出らむ<sup>掃</sup>たる時<sup>掃</sup>を<sup>掃</sup>經家ハ馬七八ひきは<sup>掃</sup>鞍あきて  
手綱む<sup>掃</sup>を<sup>掃</sup>び<sup>掃</sup>く人もつけ<sup>掃</sup>ぞ<sup>掃</sup>うち放<sup>掃</sup>し<sup>掃</sup>侍りけ<sup>掃</sup>を  
バ<sup>掃</sup>經家が馬の尻も<sup>掃</sup>隨<sup>掃</sup>ひてゆき<sup>掃</sup>けり<sup>掃</sup>さ<sup>掃</sup>く狩場<sup>掃</sup>も  
て馬の疲<sup>掃</sup>む<sup>掃</sup>たるを<sup>掃</sup>り<sup>掃</sup>あ<sup>掃</sup>ハ<sup>掃</sup>召<sup>掃</sup>め<sup>掃</sup>從<sup>掃</sup>ひて<sup>掃</sup>ぞ<sup>掃</sup>參<sup>掃</sup>ら<sup>掃</sup>む<sup>掃</sup>  
ける<sup>掃</sup>この<sup>掃</sup>や<sup>掃</sup>り<sup>掃</sup>め<sup>掃</sup>傳<sup>掃</sup>へ<sup>掃</sup>たる<sup>掃</sup>者<sup>掃</sup>あり<sup>掃</sup>經家<sup>掃</sup>い<sup>掃</sup>ふ<sup>掃</sup>ひ<sup>掃</sup>あ<sup>掃</sup>  
く入海して死<sup>掃</sup>む<sup>掃</sup>れば<sup>掃</sup>知<sup>掃</sup>る<sup>掃</sup>を<sup>掃</sup>の<sup>掃</sup>あり<sup>掃</sup>口<sup>掃</sup>を<sup>掃</sup>し<sup>掃</sup>き



ふとあり

和文讀本卷二終



明治十五年十一月十三日板權免許  
同 年十二月 出版 定價貳拾錢  
同 十八年八月十八日再版御届

埼玉縣士族

稻垣千穎

東京下谷區仲徒町三丁目廿一番地

普及舎

同下谷區練堀町十四番地

奎文堂

同日本橋區吳服町六番地



編輯出版

發兌





